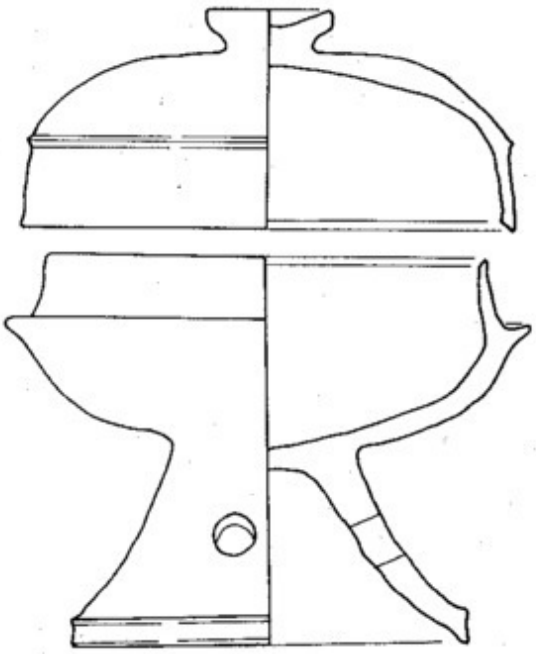
四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報9

更良岡山古墳群発掘調査概要

——四條畷市岡山所在——



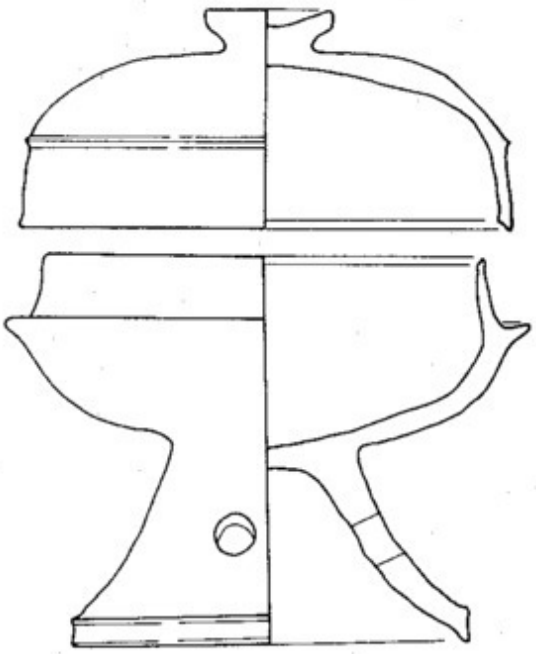
1981・3

四條畷市教育委員会

四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報９

更良岡山古墳群発掘調査概要

――四條畷市岡山所在――



1981・3

四條畷市教育委員会

はしがき

四條畷市北部の岡山地域は、原始の時代から今日に至るまで、私達の祖先が数多くの生活の跡を残しているところであります。清滝の山々につらなる北の山地にその源を発した讃良川は、寝屋川市東南台地と四條畷市の忍ケ岡丘陵との間を流れて西進し、平地に至る直前の一帯に原始から古代に至る文化の華を開かせました。すなわち、旧石器時代に属する三十数点の石器、縄文時代の後期から晩期にかけての遺構と数多くの遺物、白鳳時代に建立されたと考えられる更良寺跡を複合する更良岡山遺跡を現在に残しています。

今回の発掘調査地は、この遺跡の南忍ケ岡丘陵の一部に属する地域であり、古墳時代中期から後期にかけての築造されたと考えられる古墳二基と鎌倉時代のものと考えられる落込み状遺構を検出する結果となりました。この調査地の北には、古墳時代前期の古墳として周知されている忍ケ岡古墳があり、この時代に引続いてこの地に古墳の築造のあったことが明らかとなり、本市の歴史解明に寄与することができましたことは大きな幸であります。

この報告書は、昭和五十五年度の国庫補助事業にかゝる開発に伴なう緊急発掘調査の概要であります。調査に関しましては、大阪府教育委員会をはじめ数多くの方々のご指導とご協力をいただきました。関係していただきました皆様方に心より感謝を申しあげご挨拶といたします。

四條畷市教育委員会

教育長　櫻井敬夫

例　　言

1．本書は、四條畷市教育委員会が、昭和55年度国庫補助金事業（総額2,000,000円、補助率――国庫50％、府費25％）の交付を受けて担当実施した四條畷市岡山所在更良岡山古墳群発掘調査事業の概要報告書である。

2．調査は、昭和55年７月１日に着手し同年11月30日まで発掘作業を行ない、その後、昭和56年３月31日まで整理作業を行なった。

3．発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課技師・野島　稔を担当者とし、補助員として、森本澄一があたった。

　出土遺物の整理・実測などについては、野島　稔、森本澄一、松田裕伸、阪本冨美子、川本三智子、永井蓉子、一色ルリ子、井上智子、山口文代、樋口博子、植田真紀、松岡俊江があたった。

4．本書の執筆は、野島　稔が行なった。

5．発掘調査の進行・報告書作成などについては、大阪経済法科大学・瀬川芳則、大阪府教育委員会・井藤　徹、東大阪市教育委員会・下村晴文、グアム大学・片岡　修、寝屋川市教育委員会・塩山則之、財団法人枚方市文化財研究調査会・宇治田和生、三宅俊隆、桑原武志、畷古文化研究保存会の諸機関諸氏から種々のご教示をうけた。明記して厚く感謝の意を表したい。

6．発掘調査の進行については、株式会社中田工務店・調査作業については、大角組の全面的な協力を得た。

本 文 目 次

はしがき

例　言

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5

Ⅲ　調査概要報告

層　序 …… 8

第1号墳 …… 8

第2号墳 …… 14

土壙状遺構 …… 15

落ち込み状遺構 …… 15

Ⅳ　出土遺物 …… 21

Ⅴ　ま　と　め …… 33

Ⅵ　観　察　表 …… 35

挿　入　目　次

第1図　更良岡山古墳群調査地位置図

第2図　更良岡山古墳群周辺地形遺跡分布図

第3図　更良岡山古墳群遺構配置図

第4図　更良岡山古墳群第1号墳・土壙状遺構・落ち込み状遺構平面実測図

第5図　更良岡山古墳群第2号墳平面実測図

第6図　更良岡山古墳群第2号墳土器出土平面実測図

第7図　出土土器実測図・Ⅰ

第8図　出土土器実測図・Ⅱ

第9図　出土土器実測図・Ⅲ

第10図　出土埴輪実測図

第11図　出土石製品実測図

表　1　第2号墳出土円筒埴輪計測表

図　版　目　次

図版1　遺跡周辺の航空写真
図版2　更良岡山古墳群周辺航空写真
図版3　忍ヶ岡古墳航空写真
図版4　更良岡山古墳群遠景
図版5　更良岡山古墳群近景
図版6　更良岡山古墳群第1号墳全景・Ⅰ
図版7　更良岡山古墳群第1号墳全景・Ⅱ
図版8　更良岡山古墳群第1号墳全景・Ⅲ
図版9　更良岡山古墳群第2号墳全景
図版10　更良岡山古墳群第2号墳・第2号墳周溝底土器出土状況・Ⅰ
図版11　更良岡山古墳群第2号墳周溝底土器出土状況・Ⅱ
図版12　更良岡山古墳群第2号墳周溝底土器出土状況・Ⅲ
図版13　遺物写真・土器Ⅰ
図版14　遺物写真・土器Ⅱ
図版15　遺物写真・土器Ⅲ
図版16　遺物写真・土器Ⅳ
図版17　遺物写真・土器Ⅴ
図版18　遺物写真・土器Ⅵ
図版19　遺物写真・土器Ⅶ
図版20　遺物写真・埴輪Ⅰ
図版21　遺物写真・埴輪Ⅱ
図版22　遺物写真・埴輪Ⅲ
図版23　遺物写真・埴輪Ⅳ
図版24　遺物写真・石製品

更良岡山古墳群発掘調査概要

Ⅰ　調査に至る経過

更良岡山古墳群は、四條畷市岡山４丁目６番地に所在する。この古墳群のある忍ケ岡丘陵には、住宅、工場、養豚場等となり今回の調査地の段丘部分がかろうじて残されている状態である。

昭和24年、片山長三氏の手によってＡ地点・Ｂ地点ではじめて新池北岸の調査が実施され、表層から古瓦・須恵器・土師器片などとともに、縄文式土器の遺物も数多く検出し、縄文時代の包含層は、表土下50cmで約50～100cmの砂層の中から波状口縁の高杯形土器、元住吉山式の深鉢形土器・船橋系土器等で、いずれも縄文晩期のものが出土している。石器類も比較的多く、石鏃・石錐・石斧・敲石・石錘などで、生活に必要な諸道具類である。

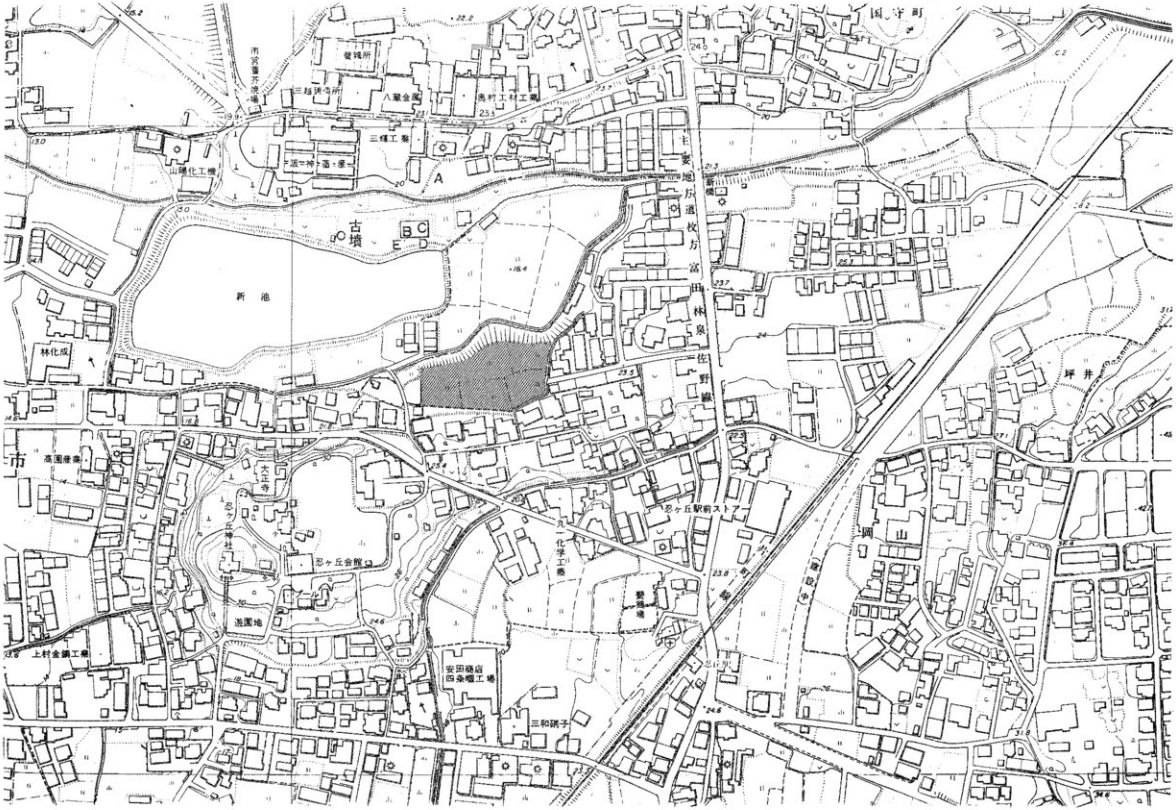
昭和44年の畷古文化研究保存会の調査は、片山氏が調査した川岸の東部分にあたるＣ地点の平屋建倉庫に調査地を設定している。この地域は、後世讃良寺の遺構と重なり、当寺院の瓦片と縄文式土器片が共に出土している。縄文式土器の出土する地山直上の堆積土の褐色砂層と砂利層上部から石器・礫器のほかに旧石器時代の遺物も検出している。

昭和45年には帝塚山大学の堅田直氏によりＤ地点で発掘され、その結果包含層の上層から擦過文・条痕文・無文の様々な器形の縄文式土器が出土している。

昭和46年の四條畷市教育委員会の調査はＥ地点で、包含層の黒色土層から縄文晩期の甕・壺・深鉢・浅鉢等の土器が出土した。又、石器類も、石鏃・石匙・石錐・石斧・敲石砥石等、生活に必要な道具を見出した。

昭和50年の四條畷市教育委員会が新池東岸の公的住宅建設用地にかかる範囲確認調査を実施した。その結果地表下1.6mの第6層褐色砂質土から縄文式土器、敲石、ハンマーストン、砥石が出土した。又隣接のトレンチからは合計22本の杭列が検出している。その杭列の間隔は30～40cmで地山に打ち込まれており、伴出遺物から鎌倉末期～室町初期にかけての旧讃良川水路の護岸工事に伴う杭列と考えられる。

過去５回にわたる調査地は讃良川岸つまり新池北岸の調査であったが、今回の調査地は新池東南の忍ケ岡丘陵上に民間宅地造成計画がなされ、過去の数多くの遺構・遺物の関連を目的に試掘調査を実施した際、古墳時代後期の円墳２基、土壙状遺構、鎌倉時代末期の落ち込み状遺構が検出し、国庫補助金事業として四條畷市教育委員会が本格調査を実施したものである。



第1図　更良岡山古墳群調査地位置図

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

更良岡山古墳群は大阪府四條畷市大字岡山に所在する。四條畷市は大阪府の北東部に位置し、奈良県との県境になる。南北に通じる東高野街道沿いには、中世の掘立柱建物跡・井戸等の遺構が存在し、陸路交通の要地であり、中世村落として栄えていた。このような地理的に重要な位置を占めていたことは、原始・古代においても同様、文化的先進地域の様相を呈し、多くの遺跡の存在が知られている。

当古墳群は生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の海抜25～30mの忍ケ岡丘陵の地形を利用して立地している。東の生駒山系から流れる水は讃良川・清滝川・権現川となり、いずれも丘陵を横切りつつ東西に谷地形を形成している。

今回の調査地はこの讃良川の左岸から発見されている。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は八幡丘陵から南は南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、この枚方台地は大きく北から枚方市船橋川・穂谷川・交野市天野川・寝屋川市寝屋川・四條畷市讃良川・清滝川という中小河川によって開かれている。この枚方台地には原始・古代の幾多の遺跡の存在が知られている。

最近になって旧石器時代遺跡の発掘調査が行なわれるようになった。枚方台地の旧石器時代遺跡としては、国府期のナイフ形石器・有舌尖頭器が出土している枚方市楠葉東遺跡、ナイフ形石器・小型舟底形石器・石核が出土した津田三ツ池遺跡、細石器・石核が出土した藤阪宮山遺跡、国府型ナイフ形石器・石核が出土した交野市神宮寺遺跡、ナイフ形石器・細石器・削器・彫器・礫器等を出土した更良岡山遺跡、有舌尖頭器を出土した南山下遺跡が知られ、他に表面採集された寝屋川市打上、四條畷市忍ケ岡古墳附近においてもナイフ形石器が採集されており、旧石器文化研究上枚方台地はきわめて重要な位置をしめている。

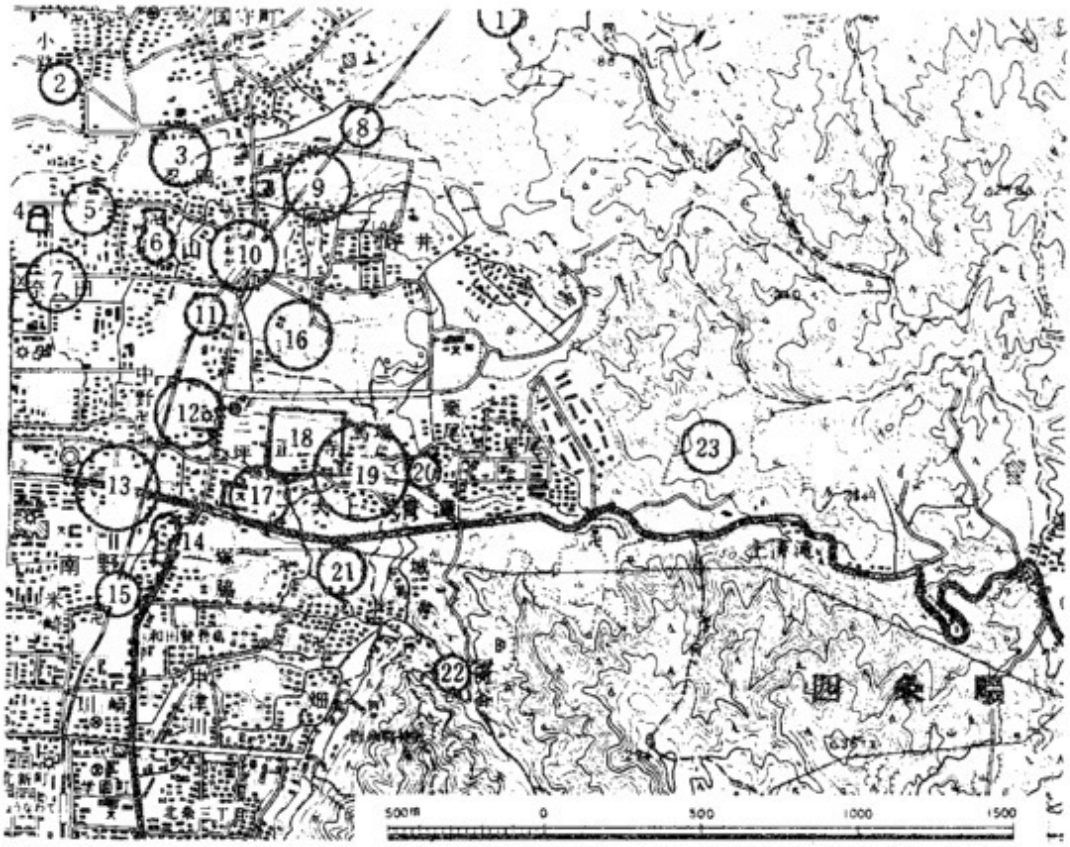
縄文時代には米粒状文、山形文を施した押型文土器を特徴とする土器が出土する交野市神宮寺遺跡、四條畷市田原遺跡において近畿地方で最古の土器が出土している。又、枚方市穂谷遺跡、大東市寺川堂山にも早期の土器が発見されている。

前期には石器のみ採集された津田三ツ池遺跡が知られる。

中期には過巻文や半截竹管文をもつ船元式土器を出土する四條畷市南山下遺跡・交野市星田旭遺跡があり、後期・晩期にはほぼ完形の高杯形土器・深鉢形土器・注口土器・土製勾玉・土偶等多量の土器・石器が出土する四條畷市更良岡山遺跡、清滝古墳群においても石鏃、深鉢形土器が出土する。

弥生時代については四條畷市田原遺跡において前期末の壺が出土し、北河内において最初の弥生時代の遺跡と考えられている。

中期初頭の畿内第Ⅱ様式の時期に出現する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡や、中期の畿



第２図　更良岡山古墳群周辺地形遺跡分布図

1．打上遺跡	8．国守遺跡	16. 岡山南遺跡
2．小路遺跡	9．坪井遺跡	17. 四條畷小学校内遺跡
3．讃良川遺跡・讃良寺跡	10. 忍ケ丘駅前遺跡	18. 正法寺跡
更良岡山古墳群	11. 南山下遺跡	19. 清滝古墳群
4．四條畷市銅鐸出土地	12. 奈良井遺跡	20. 国中遺跡
5．北口遺跡	13. 中野遺跡	21. 木間遺跡
6．忍ケ岡古墳	14. 幕の堂古墳	22. 龍尾寺跡
7．奈良田遺跡	15. 南野遺跡	23. 千畳敷遺跡

内第Ⅲ～第Ⅳ様式には磨製石剣・磨製石鏃・炭化米や直径11.5mの巨大な竪穴式住居跡をもつ田ノ口山遺跡が著名である。後期の畿内第Ⅴ様式になると枚方市・寝屋川市・交野市の淀川左岸丘陵上には数多く点在する。代表的なものとしては、長尾西遺跡、銅鏡や分銅形土製品が見つかった高地性集落の鷹塚山遺跡、六角形の竪穴式住居跡が発見された山之上天堂遺跡、鹿の絵の線刻した土器が出土した藤田山遺跡、北河内ではじめて方形周溝墓

が検出された茄子作遺跡、数多く竪穴式住居跡及び方形周溝墓をもち、住居と墓地をV字溝において分離した星ケ丘西遺跡、一棟の竪穴式住居跡から鉄鏃を含む53個の鉄器片が出土した星ケ丘遺跡がそれぞれ発見され、弥生時代文化研究上きわめて重要な場所である。

古墳について見ると8面の銅鏡を出土した万年寺山古墳、直径25mの円墳と考えられ銅鏡1面・銅鏃6本・鏃形石製品2個を出土した藤田山古墳、粘土槨内から硬玉製勾玉、ガラス製小玉・碧玉製管玉・鉄剣・鉄刀子を出土した交野市妙見山古墳、全長約80mの前方後円墳で後円墳に長さ約6.3m・幅約1mの竪穴式石室を今なお見ることのできる忍ケ岡古墳がある。前期末から中期にかけて交野市車塚古墳、枚方市禁野車塚古墳、中期には牧野車塚古墳、四條畷市墓の堂古墳がそれぞれ確認されている。後期になると生駒山系西麓に数多く分布する。大東市寺川古墳群・堂山古墳群・四條畷市清滝古墳群・交野市寺古墳群・倉治古墳群・枚方市白雉塚・比丘尼塚・寝屋川市寝屋古墳があり終末期には寝屋川市石ノ宝殿古墳がよく知られている。

古墳時代の集落跡としては、枚方台地には四條畷市が大半を占めている。

四條畷市岡山南遺跡の大溝内から切妻造りの家形埴輪に五個の堅魚木をつけたものや、円筒埴輪・蓋形埴輪・動物形埴輪とともに最古の木製下駄が出土している。中野遺跡においては5世紀後半の製塩土器や、最古型式の須恵器、勾玉、臼玉、紡錘車が出土し、隣接地の奈良井遺跡には、石敷製塩炉及び直径約40mの方形周溝状の祭祀場が検出し、周溝内から多量の土器とともに手捏ね土器、人形土製品、動物形土製品、滑石製臼玉がそれぞれ一括で出土している。又同一層内から小型の蒙古野馬が四体分を埋葬されていた。

古代から中世にかけての歴史時代になると数多くの遺跡が知られている。

Ⅲ　調査概要報告

今回の調査地点は、四條畷市岡山4丁目6番地で、忍ケ岡丘陵の北側斜面に位置し、調査対象地は水田及び畑地であった。

調査は、昭和50年3月の公的住宅建設用地に伴う範囲確認調査で2ケ所のトレンチを設定した際R-012第1トレンチの第3層褐色砂質土、第4層褐色砂層となっており、第3層からの遺物として縄文式土器、土師質小皿、陶磁器が出土している。もう一ケ所のR-013第1トレンチの第3層褐色砂質土で東西方向に幅38cm、深さ26cmの溝状遺構を検出しており、遺構内から須恵器、羽釜片が出土している。

区画設定は、昭和50年の調査基準として10m区画でRライン・Sライン・Tライン……を縦軸に命名し、東西・横軸は北端から10m毎に算用数字の011·012·013をあてて区画を設定した。それ故1区画は100㎡の面積を有する。

層序

調査地中央の013ラインの基本的層序は、上から第Ⅰ層（耕土）、第Ⅱ層（床土）、第Ⅲ層（褐色砂質土）、第Ⅳ層（褐色砂層）、第Ⅴ層（淡褐色砂質土）となる。各層は南から北へ東から西へと傾斜し、特に遺構のベース面（第Ⅴ層直上）においては、西側S－012ポイントと東側U－012ポイントで約0.7mの比高差が認められた。

第Ⅰ層　耕土。

第Ⅱ層　床土。ほぼ南北水平に床土が置かれている。

第Ⅲ層　厚さ約10cmで南から北へかなりの傾斜をもっている。土師質小皿、染め付けの磁器類、陶器類などが出土している。水田耕作時に撹乱をされている。

第Ⅳ層　厚さ約20～30cmで全域に認められる。瓦器椀・土師質小皿・羽釜・擂鉢·練鉢·須恵器・銅椀等が出土しており、鎌倉時代末期～室町時代の包含層を削りとるように堆積している。

第Ⅴ層　厚さ約20～40cmで全域に認められる。南の台地の014ラインについては、東から西へいくに従って厚くなっており、流れ込みによる堆積と考えられる。出土遺物としては、瓦器椀、土師質皿、羽釜等が出土している。鎌倉時代末期～室町時代のものが大半を占めている。又、北側の低い013～012ラインにかけての台地については、南から北へいくに従って徐々に薄くなっており、これは地形によるものの流れ込み堆積と考えられる。出土遺物はやはり、須恵器、土師器、瓦器、土師質小皿で古墳時代と鎌倉時代のものの遺物が大半を占めている。

第1号墳（第4図，図版6～8）

調査区S－012に第1号墳が検出されている。昭和50年度の公的住宅用地範囲確認調査

地で、R－012地区に1.9m×1.3m、R－013地区に2m×1.4mのトレンチを設定した際縄文式土器・須恵器・土師質小皿・陶磁器・羽釜片等が出土したが遺構については確認されなかった。

第1号墳を検出したS－012地区の水田は、この台地の中で一段低く約1mの比高差である。

第1号墳の北側は急な崖のため不明であるが、全体としてほぼ円形を呈し、径は約18～19mと考えられる。マウンド上部はすでに削平されており埋葬施設を確認することはできなかった。残存高は約20～30cmを測る。

特に古墳中央北側は室町時代初頭に攪乱を受けたことが周溝上層より瓦器椀・土師質小皿等の出土遺物から明らかである。

周溝の肩部は標高O.P.19.90m、幅1.5～2.5m、深さ0.2～0.4mを測った。周溝も上部削平を受けて浅くなっているが、南側周溝（S－012）はほぼ完全な形で検出された。南側周溝内の堆積土層は、上層から褐色砂質土層、淡褐色砂質土層の順に堆積している。

淡褐色砂質土層内から須恵器杯身・高杯・埴輪が出土した。これらの出土遺物はすべて粉砕して投棄された状態であった。

西側周溝の堆積土層は淡褐色砂質土層が堆積し、すでに上層の褐色砂質土層は削平されている。周溝内からの出土遺物としては、須恵器杯身・杯蓋・無蓋高杯・土師器高杯・片口大鉢がそれぞれ出土している。

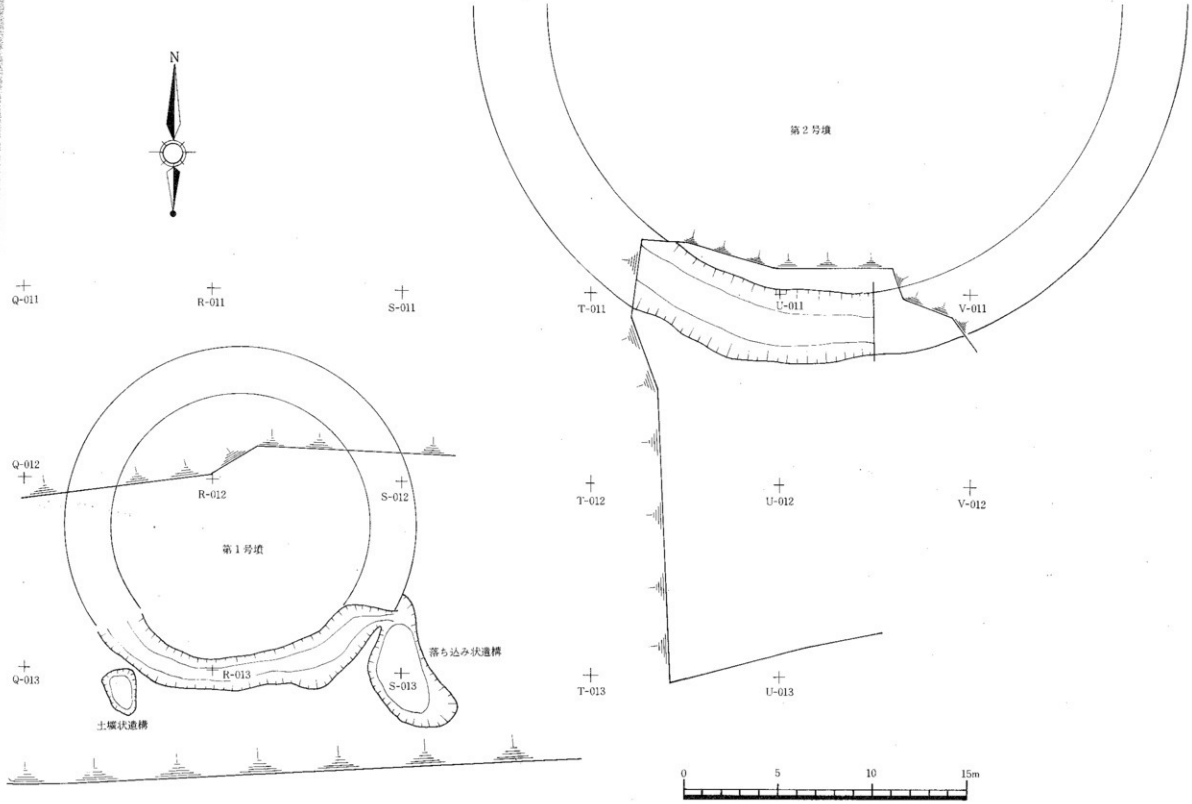
須恵器蓋杯(蓋)(第8図－17～21)は口径15.5cm、器高5.2cmを計る。口縁部は、ほぼ垂直に下り端部は内傾する段を成す。又、断面三角形の鋭い稜をもち天井部も高い大型の蓋杯が出土している。

周溝内上層の褐色砂質土から蓋杯（身）・(第8図－23～24) 口径10.2cm、器高3.8cm、たちあがり高0.3cm、受部径13cmを計る。たちあがりは、内傾してのび端部は丸くおわる。受部は上外方にのび端部は丸い。底部は深く丸い。同一周溝内の下層の淡褐色砂質土からは(第8図－26～28) 蓋杯（身）、口径12.4cm、器高4.7cmたちあがり高1.8cm、受部径15cmを計る。たちあがりは内傾してのび短く直立して端部に至る。受部は上外方にのび端部は丸くおわる。底部は深く大型の杯身がそれぞれ出土している。

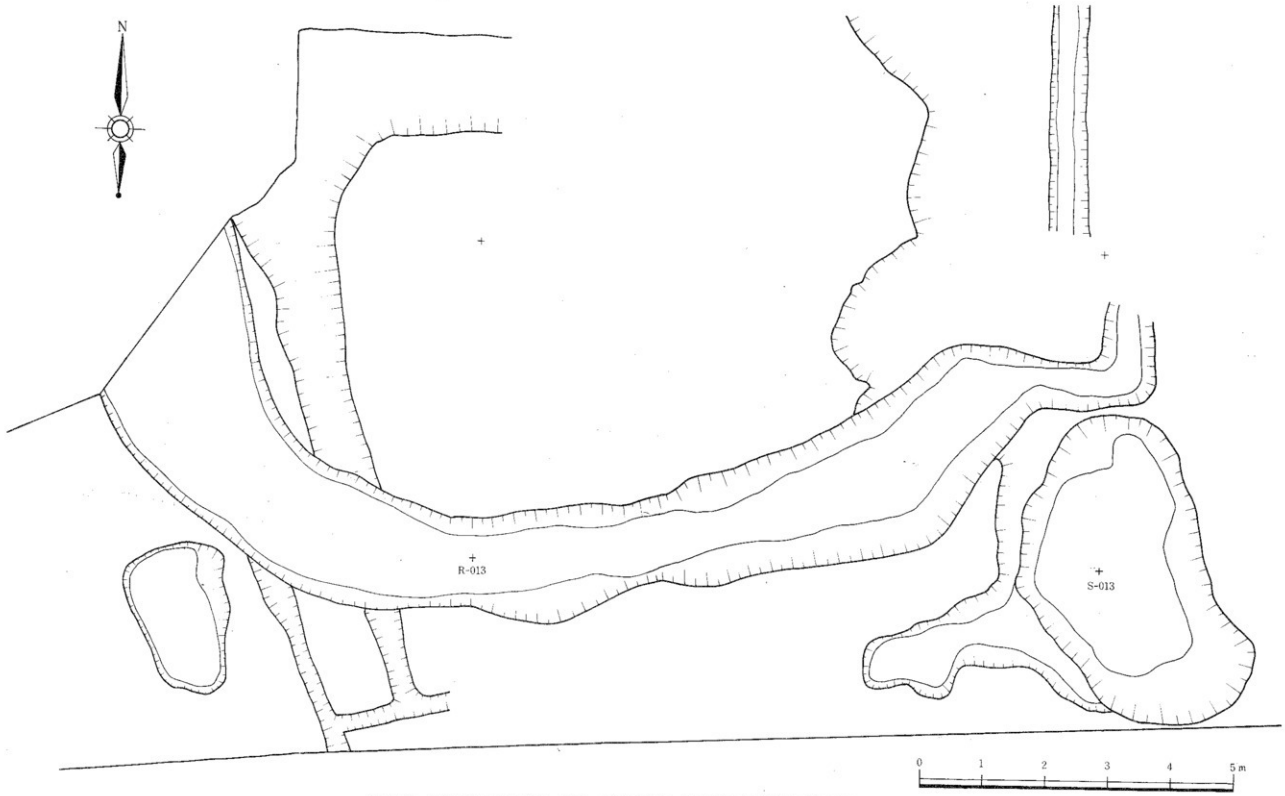
実測可能な土師器高杯3点、須恵器高杯3点も出ている。

土師器高杯(第8図－30～32)、口径14.2cm、器高13.9cm、脚部高10cmを計る。浅い杯部で脚部から外上方へのびる口縁部で、脚部は、あまり広がらない脚柱部であり、握りしめた痕跡が残っている。

無蓋高杯(第8図－33～36)、口径14.2cm、器高7.4cm、脚部高2.9cmを計る。口縁部は



第3図　更良岡山古墳群遺構配置図



第4図　更良岡山古墳群第1号墳・土壙状遺構・落ち込み状遺構平面実測図

上外方にのび端部に至る。底部は浅く、脚部は杯部より直角に張り出して下外方にのび、裾部で屈曲する。

第1号墳の周溝を検出したのは、013ラインを中心に北へ5.5mまでであり、これは古墳周溝の$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{5}$に当たる。大半の周溝は後世の鎌倉時代に削平されており、012ラインの周溝を確認をすることができなかった。

第2号墳（第5～6図、図版9～12）

第1号墳の北東部のU－011ポイントにおいて第2号墳を検出した。

第2号墳はすぐ北側の崖部において大半が削り取られていたが、南側周溝部の一部だけ検出することができた。

マウンド上部は第1号墳と同様に削平されており、墳丘部埋葬施設を確認することはできなかった。

現存する周溝肩部は標高O.P.19.30m、幅3～4m、深さ0.8～1.2mを測る。

周溝の堆積土層は、褐色砂質土層・淡褐色砂質土層・黒褐色砂質土層・青黒色砂質土層・青褐色砂質土層・黄褐色砂質土層に堆積している。

第Ⅴ層の黒褐色砂質土から須恵器甕・鉢・土師器甕・蓋形埴輪・円筒埴輪が出土している。又、第Ⅶ層の黄褐色砂質土の最下層から鉢・台付長頸壺・土師器高杯・円筒埴輪がそれぞれ出土している。出土遺物はすべて周溝内からのものである。

第2号墳は第1号墳と違い堆積土層及び出土遺物からみて全く撹乱を受けておらず、ほぼ完全な形で周溝が検出した。周溝内出土の甕・円筒埴輪・蓋形埴輪からみて、墳丘部に置かれていた供献土器及び埴輪列が周溝内に落ちた状況での出土であった。

古墳の築造は、忍ケ岡丘陵を構成している黄褐色花崗岩風化土層を一部成形した上に、2層にわけて盛土を行なう。

出土遺物としては、蓋杯(蓋)(第8図－41)口径10.6cm、器高3.2cmを計る。口縁部は少し内弯して端部に至る。天井部は浅く凹を有する。蓋杯(身)(第8図42～45)口径9.1cm、器高2.2cm、たちあがり高0.1cm、受部経10.7cmを計る。たちあがりは内傾してたちあがり、端部は鋭い、受部は上外方にのび端部は丸い。

周溝内最下層の黒褐色砂質土から鉢3点が出土している。中でも第8図－38・39は同一場所で第8図－40の台付壺、第8図－46の土師高坏が一括場所からの出土であった。(図版12) 鉢は口縁部が欠損して不明であるが、口頸部から外弯気味に外上方にのび口縁部に至る。2例は肩部に1条の凹線を有し、体部最大径は中位に位置している。第8図－37の鉢の中には、円孔穿った際の穿部が見つかっており、円孔穿の好資料である。

甕は、口径28cm、器高61.5cm、基部径19.5cm、胴部径49.2cm、口頸部高10.0cmの大型甕である。口頸部は基部より外反しながら立ち上り、弯曲して端部に至る。胴部は肩の張っ

た球形を呈しており、外面は叩きを施し、内面は同心円文の叩きを施している。

円筒埴輪（第10図）が出土している。外面調整は1次調整のタテハケで、タガの突出度が低く、断面が不整形である。内面調整はナデ調整が施されている。

蓋形埴輪〈十字形立ち飾り〉（第10図－19）（図版11）U－011ポイントから破片が数個散乱していた。立ち飾りの一枚（実測図の左）が下半分だけでさらに3枚は身の上端を欠損している。笠の受け部に挿入する心棒は、完全なものであった。現存する長さ34.3cm、立ち飾りの長さ19.3cmある。

立ち飾りは厚さ1.5cmの粘土板で、これを4枚互いに直角に基部の十字形に貼りつけている。先端は細くなり、内側に1個の突起がある。立ち飾りに2本の平行線による線刻があり、側面にも1本の線刻がある。各中央部に円孔が1ケ所穿っている。

心棒の直径は約4cmある。復原長約41cmある。

土壙状遺構（第4図、図版6）

R－013地区第1号墳周溝外に土壙状遺構1基を検出した。

土壙状遺構は、東西1.5m南北2.4m、深さ0.85mのU字状を呈し、主軸をN－11°－Wに土壙をつくっている。

土壙中央部から須恵器甕第8図－54、土壙底から須恵器甕第8図－55がそれぞれ出土している。また、土壙検出面において馬の歯が出土しており、この土壙内に馬の頭骨部の埋葬を行なったと考えられる。このような出土例は、四條畷市清滝古墳群第2号墳周溝内に約0.2mの土壙を堀り込んで馬の頭骨部を埋葬しており、又、奈良井遺跡においては、一辺約40mの方形をめぐらす祭祀場から完全な馬の骨1頭分及び頭骨だけを土壙に埋葬している例を含めて、これまでに7例の馬の埋葬を行なわれている。

出土遺物の須恵器甕（第8図－55）口縁部は上外方にのび口縁部が少し屈曲したのち上外方にのび端部で内傾して丸くおわる。頸部外面の上に1条の凸線を有し、上下に波状文を施している。

落ち込み状遺構（第4図、図版7）

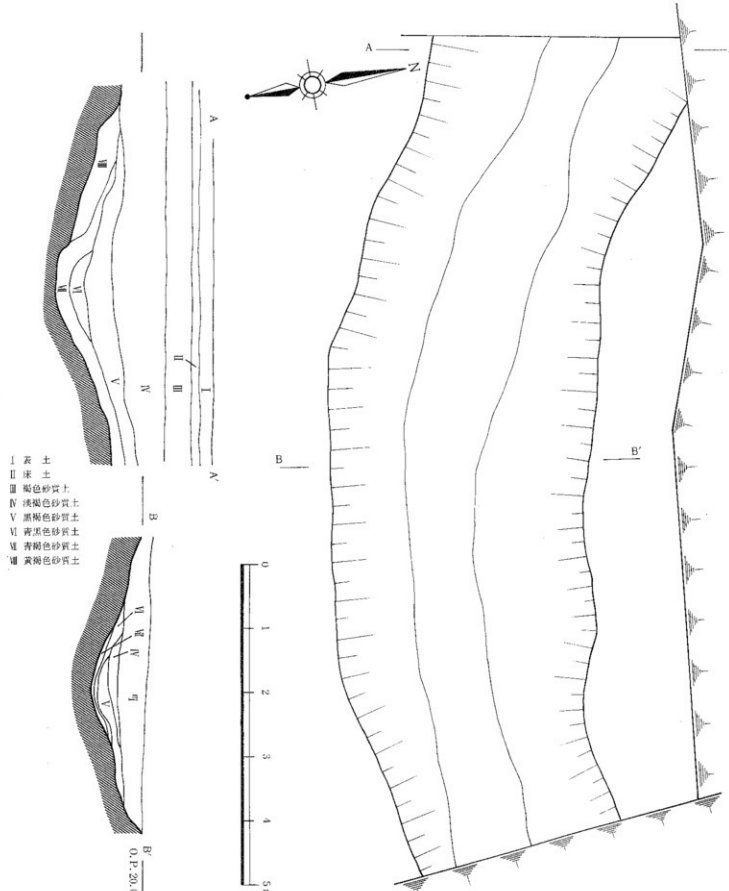
S－013地区に第1号墳周溝外に落ち込み状遺構1基検出されている。

落ち込み状遺構は、東西3m南北5m深さ0.3mを測る。底は平底に近く、全体に北から南へ少しであるが傾斜している。

東側の肩部に花崗岩の石敷を施されている。又、石敷内側には松杭を地山に打ち込まれている。落ち込み状遺構内にも花崗岩の石が数多く検出している。

遺構内の堆積土は褐色砂質土層で第8図－48～50の土師質小皿、第8図－53瓦器椀、第9図－58羽釜がそれぞれ出土している。

土師質小皿は、口径8.2cm、器高1.9cmを計る。口縁部内外面を横ナデ、下面には指圧



第 5 図　更良岡山古墳群第 2 号墳平面実測図

第６図　更良岡山古墳群第２号墳土器出土平面実測図

痕で調整されている。

瓦器椀は、口径9.0㎝、器高3.8㎝を計る。比較的深い器形で貼り付け高台をもたない終末期の瓦器椀である。内面には暗文を施している。

羽釜は、口径24.8㎝、残存高20.5㎝を計る。口縁部は体部より短く立ち上がり、更に外方へ屈曲する。瓦質羽釜である。

以上の土器とともに平瓦が出土している。

第8図－52の銅製品はR－013ポイントの第3層褐色砂質土の中世包含層から瓦器椀、土師質皿とともに出土したものである。

Ⅳ 出土遺物

概観

2基の円墳・土壙状遺構・落ち込み状遺構に伴って出土した遺物は、土器・埴輪・銅製品からなる。さらに昭和44年、46年に暖古文化研究保存会・四條畷市教育委員会が調査した際に一部の古墳時代中期末～後期の土器・石製品が出土していることが知られていたが、未報告資料であった。今回の更良岡山古墳群の北限に位置し、調査担当者によれば、一部墳丘をもち周溝内からの一括資料（第7図）出土遺物実測図Ⅰとして合わせて報告しておきたい。

有蓋高杯（第7図－1，3，5，12）（図版13～14）

有蓋高杯の(1)・(3)・(5)は、杯部のたちあがりは、内傾したのち直立し端部は内傾する凹面を成す。受部は長く、外上方にのび端部は丸い。底部は深く丸い。脚部は垂直に短く下った後、下外方にのび下内方に屈曲する。長方形又は円形のスカシ窓を三方向に有する。(12)は、たちあがりは内傾し更に直立する。受部は外方に短かくのび端部に至る。脚部は外下方に広がり端部は内弯する稜をもつ。脚部中位に2条の沈線をめぐり2段に四角形のスカシ窓を三方向に穿っている。

無蓋高杯（第7図－6）（図版14）

脚部は、脚柱部よりゆるやかに裾部に至る、杯部との接合部に棒さし痕がみられる。脚柱部外面は縦方向の刷毛目が施されている。

高杯（蓋）（第7図－2，4）（図版13）

口縁部はほぼ垂直に下り、端部は内傾する平面を成す。稜は断面三角形を成し端部は鋭い。天井部は高く丸い。

土師高杯（第7図－7）（図版14）

脚部のみ出土で、脚柱部からゆるやかに裾部に至り、端部はヘラ削りされた形にちかくとじる。杯部との接合部に棒さし痕がみられる。

甕（第7図－8）（図版14）

口頸部より外弯気味に外上方にのびる口縁、体部は丸味をもち、最大径が体部中位に位置する。底部は丸底で中位に円孔を穿っている。

蓋杯（蓋）（第7図－9）（図版14）

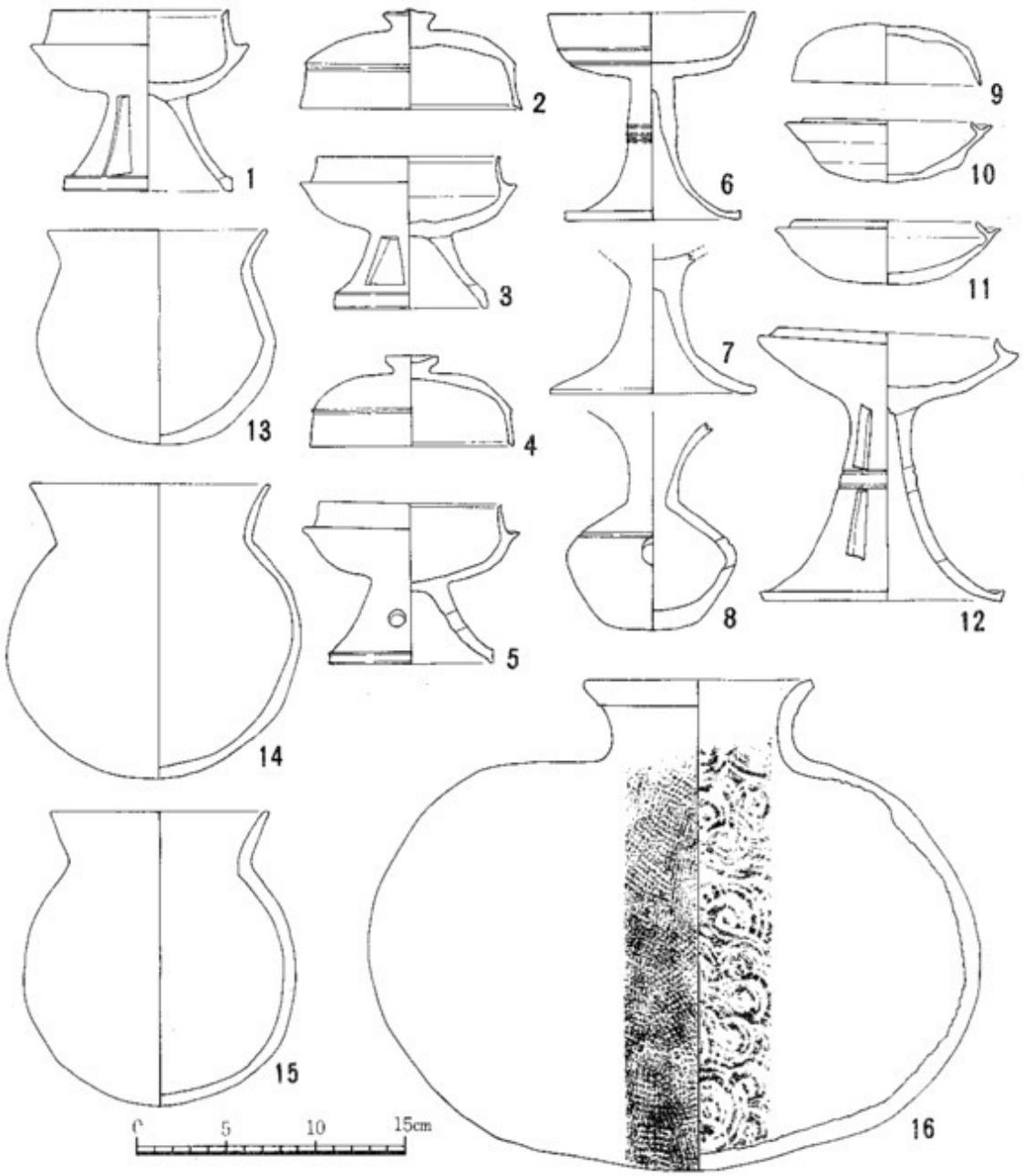
口縁部は内弯気味に下外方にのび端部は丸い。天井部はやや高く丸い。

蓋杯（身）（第7図－10・11）（図版15）

たちあがりは内傾し、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部に至る。底部はやや深く平ら。

土師器甕（第7図—13～15）（図版14～15）

基部でゆるやかに外弯し外上方へ短くのびる。胴部中位に最大径をもち球形丸底を呈す。外面は全体に細かい刷毛目が施されている。



第7図　出土土器実測図・Ⅰ

横瓮（第7図—16）（図版 15）

口縁部は基部から上外方に伸び、中位に断面三角形の凸線を有し、端部は丸い。肩部は口縁部と 90° で下外方に下り、底部に至る。体部最大径を中位に位置する。

第1号墳出土土器

蓋杯（蓋）（第8図—17～21）（図版 16）

蓋杯の蓋(17)、(18)、(19)、(21)口縁部はほぼ垂直に下り端部近くで短く外弯し、端部は内傾する凹面を成す。稜は鋭く天井部は高い。(20)口縁部は外下方に下り端部は丸い。

蓋杯（身）（第8図—23～28）（図版 16）

蓋杯の身(23)、(24)、(25)たちあがりは内傾してのび端部は丸い。受部はやや上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸い。(26)、(27)、(28)たちあがりは内傾してのび端部は内傾する平面を成す。受部は上外方にのび端部は丸い。

土師器椀（第8図—29）

口縁部は全体に浅い皿状を呈し、口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は丸い。体部は平坦な平底から丸くゆるやかにのびて口縁部に続く。

土師器高杯（第8図—30～32）

浅い杯部で脚部から外上方へのびて口縁端部に至る。脚部はほとんどひらかずに裾部に至り広がる。脚柱部に握りしめた痕跡がある。

無蓋高杯（第8図—33～34，36）（図版 16）

(33)、(34)口縁部は上外方にのび端部は丸い。底部は浅く丸い。脚部は杯部よりほぼ 90° 張り出し下外方へのび端部近くで短かく水平にのび丸く屈曲し、丸い端部に至る。

(36)口縁部は内弯気味に外傾し端部は丸い。杯部に断面三角形の2条の凸線を有す。

第2号墳出土土器（第8図）（図版17～18）

甕（第8図—37～39）（図版17）

体部の小形化で最大径はほぼ$\frac{1}{2}$前後に求め球形をなす。口頸部は基部が細くラッパ状に外反し、頸端部で段をなして外反する。体部及び頸部に文様は施されていない。

台付長頸壺（第8図—40）（図版18）

口頸部はやや内傾して立ち上る。肩部は口頸部と125°に開き、体部$\frac{1}{2}$に最大径を有し、2条の沈線がめぐり、下内方へ下る。底部はハの字形の高台を付す。

蓋杯（蓋）（第8図—41）（図版17）

口縁部はやや内弯し、端部は丸い。

蓋杯（身）（第８図－42～45）（図版17）

たちあがりは、短かく内傾し端部は鋭いものと端部は丸いものがある。底部は浅いもの(42)、(43)底部は深く、やや丸いもの(44)、(45)の２種が出土している。

土師高杯（第８図－46）（第９図－56）（図版17）

椀状の浅い杯部をもつ高杯である。杯部と脚部の接合は挿入法によって行なわれている。(56)は挿入法の接合によって外面にはみ出した粘土はヘラで掻き取っている。杯部内面はナデ調整、外面は回転ナデ調整をそれぞれ施されている。

甕（第９図－59）（図版18）

口頸部は、外反して立ち上り端部近くでやや外下方に短かく張り出し、さらに外上方にでた端部は丸くおわる。

肩部は口縁部とほぼ直角に成して下り、最大径は中位に位置する。

外面は平行タタキで内面は同心円タタキを施している。残存していた周溝内からは甕はこの土器１点だけの出土であった。

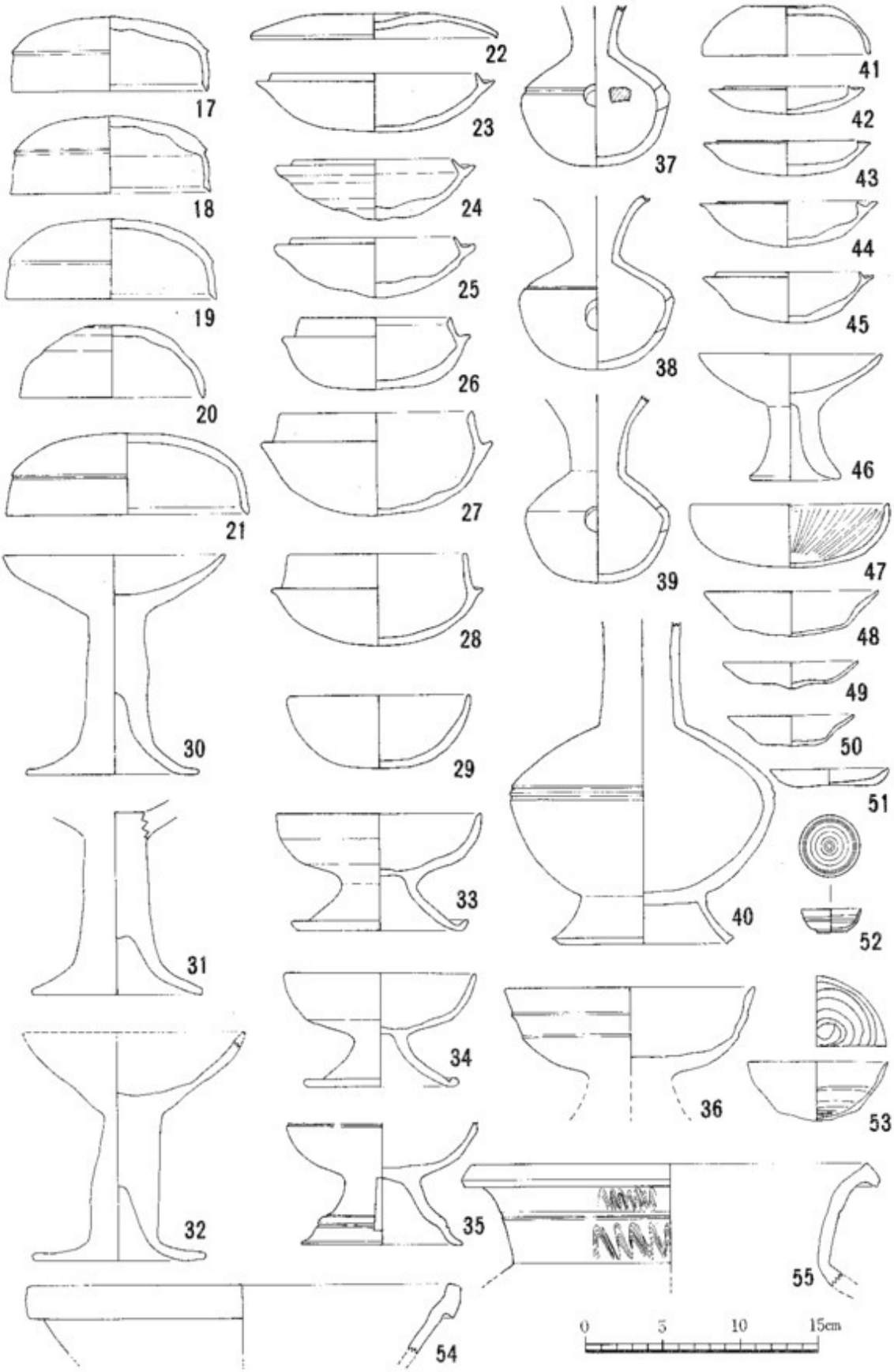
円筒埴輪（第10図）（図版20～23）

第２号墳周溝内には小さく割れた数多くの破片が散乱していた。底部から第１突帯をもつ普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪を適宜図示したものである。

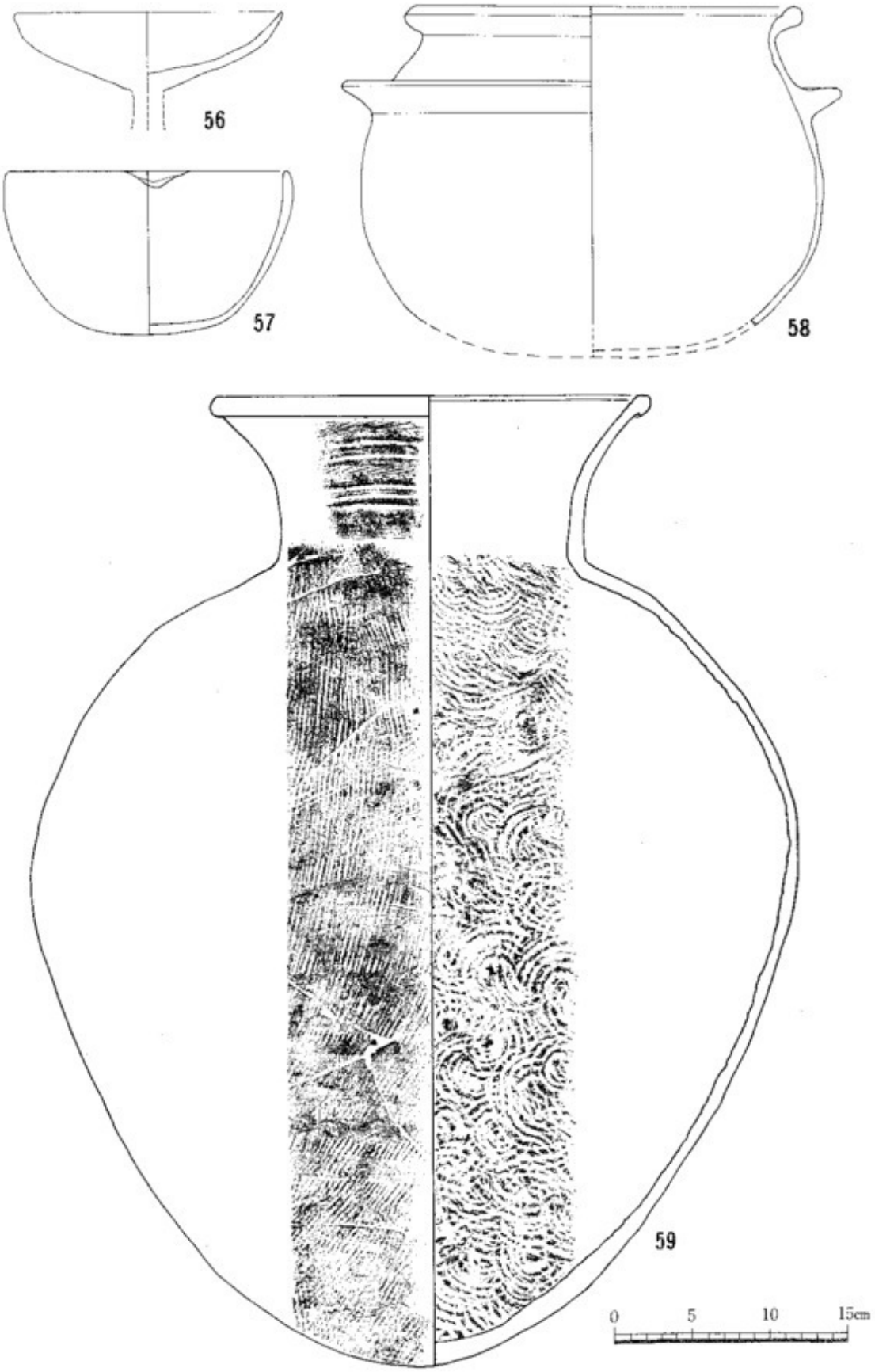
(1)は朝顔形円筒埴輪で肩部のみ残存しており円筒上端の突帯は直径約20.5cm、幅約１.１cm、くびれ部径約10.8cm、突帯の断面は台形状の扁平を呈しており、いずれも極端に突出度は低い。頸部にめぐらされた突帯と肩部と体部の境目にめぐらされているものとは極端に突出度が低い。次に外面の調整は丸味のある肩部で横ハケが丁寧に施されている。内面の調整は、くびれ部に比較的荒い横ハケが施されている。肩部突帯内面には粘土の継ぎ目が認められ、その部分には指頭圧痕が顕著にみられる。全体に色調は赤褐色を呈し、焼成はやや軟質であり、良好である。また胎土には砂粒等が含まれている。

次に２～17の普通円筒埴輪について述べることにする。

(2)は底径12.0cm、第１突帯は下から約6.5cmでその直径約13.1cm、残存高約15.0cm、器壁は1.4cm前後で、２段目にはいびつな円形の透しがある。突帯は小さく、幅は1.5cm程で0.5cm弱出ているにすぎない。外面の調整は荒い刷毛目を縦方向に調整されている。最下段は指頭によって強くナデられた跡が明瞭に残っている。(2)とほぼ同じ様相を示すのが(5)、(6)、(11)で、(5)は底径10.6cm、第１突帯は底から約11.0cmで、その直径約15.6cm、残存高約12.6cm、器壁は1.0cm前後である。突帯は幅約1.7cmで0.5cm弱出ている。内面調整に指圧痕が顕著にみられる。(6)は底径12.8cm、残存高約10.5cm、第１突帯は底から約7.3cmで、その直径14.7cm、器壁は1.0cm前後である。突帯は幅1.7cmで、0.5cm弱出ている。内面調整に指頭痕が認められる。(11)は、底径12.5cm、第１突帯は底から約17.0cmでその直



第8図　出土土器実測図・Ⅱ



第9図　出土土器実測図・Ⅲ

径約15.4cm、器壁は1.0cm前後である。2段目には、円形の透かしがある。突帯は小さく幅は約1.4cm程で0.5cm弱出ているにすぎない。内面調整の最下段に指頭によって強くなでられた跡が明瞭に残っている。

(3)は、底径10.4cm、第1突帯は下から約10.1cmでその直徒約14.7cm、残存高約15.3cm、器壁は1.3cm前後で、2段目には円形の透かしがある。突帯の幅は約1.8cm程で0.5cm弱出ているにすぎない。外面の調整は、縦方向の細かい刷毛目を施した後、指ナデによって整形されている。内面には粘土の継ぎ目が認められる。

(4)は、底径12.7cm、第1突帯は下から約10.3cmでその直径約14.5cm、残存高約15.0cm、器壁は1.0cm前後で2段目には円形の透かしがある。突帯の幅は2.0cm程で、0.4cm弱出ているにすぎない。外面の調整は縦方向の細い刷毛目が施された後、最下段において指ナデによって刷毛目が消されている。

(7)は、底径12.5cm、第1突帯は下から約10.5cmで、その直径約15.0cm、残存高約15.0cm器壁は1.2cm前後で、2段目に円形の透かしがある。突帯の幅は1.4cm程で0.5cm弱出ている。外面調整は連続的な縦ハケで、工具を器壁上で止めながら施したようにみられる。止めたさいの工具痕が横の条線となって残っている。第1突帯部から底に至っては工具は器壁から離さない。

(8)は、底径13.7cm、第1突帯は下から約10.5cmでその直径約16.6cm、残存高約15.3cm、器壁0.6cm前後である。外面調整は横ハケを施し、底部調整はケズリを行なっている。

(9)は、底径11.4cm、第1突帯は下から約10.3cmでその直径約16.5cm、残存高約12.8cm、器壁0.7cm前後で突帯の幅1.6cm程で0.3cm弱出ている。外面調整は縦ハケを施している。底部調整は内面に棒指をあて残る指を外面にあてて、はさみこむようにして底部に押圧を加えている。(9)とほぼ同じ様相を示すものが(10)、(12)、(13)で、(10)は底径11.0cm、第1突帯は底から約11.0cmでその直径約17.0cm、残存高約13.2cm、器壁は0.8cm前後である。(12)は、底径11.7cm、第1突帯は下から約12.3cm、その直径約15.8cm、残存高約14.0cm、器壁は0.8cm前後である。(13)は、底径12.0cm、第1突帯は下から約9.0cmで、その直径約15.2cm残存高12.5cmである。

(14)は、底径13.2cm、第1突帯は底から約10.2cmで、その直径約15.3cm、さらにその上約7.0cmに第2突帯がある。第2突帯の直径は17.8cm、残存高約25.0cmである。2段目には約5.7cmの円形透しがある。突帯の幅は0.8cm程で0.5cm弱出ている。外面調整は連続的な縦ハケが施されている。内面の調整は一部に粘土の継ぎ目が認められる。底部調整は板状の工具で押圧しており、底部に調整を加えている。

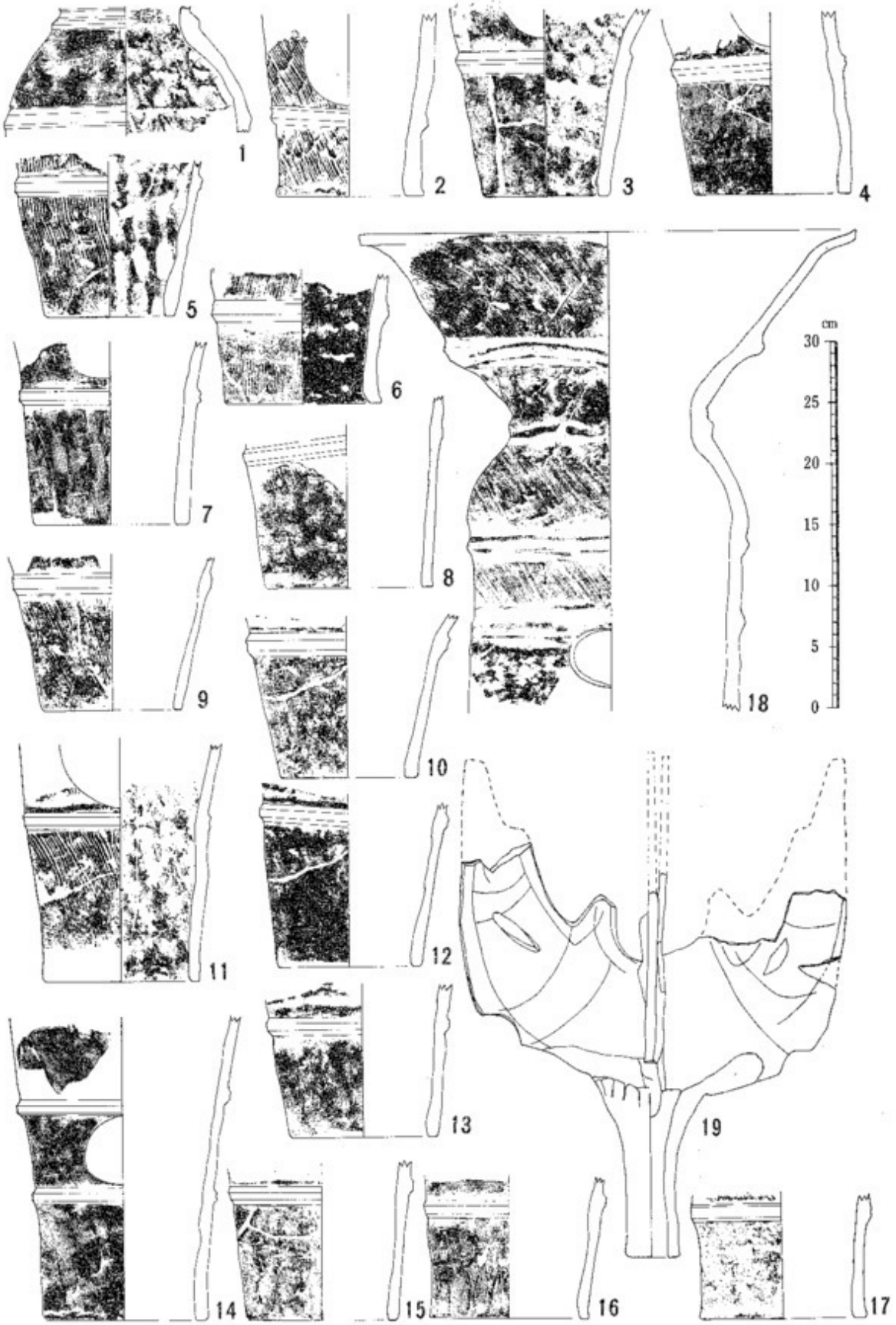
(15)は、底径12.2cm、第1突帯は底から約10.0cmでその直径約15.3cm、残存高約13.0cm、外面調整は縦ハケを施している。

⑯は、底径13.0cm、第1突帯は底から約9.2cmで、その直径約15.2cm、残存高約11.7cm外面調整は縦ハケを施している。

⑰は、底径13.5cm、第1突帯は底から約8.8cmでその直径約14.9cm、残存高約10.5cm、外面調整は磨耗しているが一部に細かい縦ハケが残っている。

⑱は、朝顔形埴輪で、口縁部と肩部及び体部の上部が残存している。外反する口縁部と丸味のある肩部を有する。口縁端部は横ナデによって丁寧に整形されている。突帯の断面形については、ほぼ台形状を呈しており、いずれも突出度は低いが、中でも特に体部にめぐらされた突帯は極端に突出度が低くその断面は扁平である。また頸部の突帯は上面が強くナデられていると思われるため断面は不整形であり、これも突出度は部分的に低い。体部中央に4.8cmの円形の透しがある。口縁部の径は41.0cm、口縁部と頸部の中央に一条の突帯があり、その直径は約26.6cm、突帯幅1.5cm程で0.7cm弱出ている。頸部は、直径約16.8cm、突帯幅1.2cm程で0.4cm弱出ている。体部に2段の突帯がめぐらされている。頸部から下の第1段突帯の径は約23.4cm、突帯幅1.5cm程で0.5cm弱出ている。さらにその下約7.0cmに第2突帯があり、その径は約22.7cm、突帯幅2.0cm程で0.4cm弱出ている。外面の調整は、口縁部には横ナデを施し、その下は右下りの縦方向のハケが施されている。ハケ目はやや荒い。また肩部と体部には細かい縦ハケを施した後、板状のものでナデられている。また口縁中央の突帯内面には粘土の継ぎ目が認められ、この部分には指頭圧痕が顕著にみられる。頸部から肩部にかけては指ナデにより、また体部の突帯の内面には粘土の継ぎ目が認められ、この部分にも指頭圧によって整形されている。

⑲は、蓋形埴輪の十字形立ち飾り部である。立ち飾りは厚さ約1.5cmの粘土板で、これを4枚互いに直角に基部の十字形に貼りつけている。立ち飾り先端は欠損しており不明である。内側に幅約3.5cm、高さ約3cmの突起が4ヶ所につけられている。突起部との相対するところに半円形に切り込みが入れられている。1枚の粘土板は基部で約10.5cm ～ 約11.0cm、突起部で約13.0cm、突起部と欠端の$\frac{1}{2}$では約6.0cmをはかる。4枚の粘土板はそれぞれ線刻及び楕円形の孔が異っている。実測図の左は幅1.0cm、長辺5.0cmである。又、実測図右は幅1.1cm、長辺3.3cmである。線刻も基本的には同じであるが、線刻幅及び線刻交叉部についても4枚の飾り板両面が異る。線刻は突起部で1本の線刻で交叉させており、外側についても1本の線刻がなされている。この内外の各1本の線刻を行った後に、それに直交する形で楕円形上部及び突起部に各2本の線刻を施している。笠の受け部に挿入する心棒は筒状を呈しており根本で幅約9.0cm、内径約5.0cm、基底部で約4.0cm、内径約3.0cmで、心棒中央部が内外径とも最も細く、外径約4.1cm、内径2.2cmである。まず最初に挿入する心棒と上部の杯状のものをつくり、杯部と心棒の接合は外面で指圧により整形を行う。その後4枚の粘土板を十字形に貼りつけ、杯部との接合部はえぐり、一部に



第10図　出土埴輪実測図

挿入する。その後指圧及びヘラにより整形を行ない、最後に4枚の粘土板と杯部の4ヶ所の間に棒状のもので円孔をあけている。

表1　第2号墳出土円筒埴輪計測表

No.	底径	第1突帯径	第2突帯径	円形透径	第1突帯幅	底部～第1突帯	色調
1	——	20.5	——	——	1.1	——	赤褐色
2	12.0	13.1	——	(7.2)？	1.5	6.5	褐色
3	10.4	14.7	——	(6.0)？	1.8	10.1	褐色
4	12.7	14.5	——	(6.4)？	2.0	10.3	赤褐色
5	10.6	15.6	——	——	1.7	11.0	赤褐色
6	12.8	14.7	——	——	1.7	7.3	褐色
7	12.5	15.0	——	(6.0)？	1.4	10.5	赤褐色
8	13.7	16.6	——	——	——	10.5	黄褐色
9	11.4	16.5	——	——	1.6	10.3	淡褐色
10	11.0	17.0	——	——	——	11.0	赤褐色
11	12.5	15.4	——	(11.0)？	1.4	17.0	黄褐色
12	11.7	15.8	——	——	——	12.3	赤褐色
13	12.0	15.2	——	——	——	9.0	赤褐色
14	13.2	15.3	17.8	5.7	0.8	10.2	黒褐色
15	12.2	15.3	——	——	——	10.0	赤褐色
16	13.0	15.2	——	——	——	9.2	赤褐色
17	13.5	14.9	——	——	——	8.8	淡褐色
18	——	23.4	22.7	4.8	1.5	——	褐色

土壙状遺構出土土器（第8図）

甕　（第8図—54，55）

口頸部は外反して立ち上り端部近くでやや外下方に短かく張り出し、さらに外上方にのびた端部は丸くおわる。

54のみ口縁部中央に1条の沈線を有し、2条の波状文を施している。

落ち込み状遺構出土土器（第８図―48～51）（第９図―58）（図版19）

土師質皿（第８図―48～53）（図版19）

口頸の大きな深い皿(49)と、(50)の普通位の皿、(51)の浅い皿の３種があり内面はナデ調整が施されているが磨耗がひどい。

瓦器椀（第８図―53）（図版19）

終末期の瓦器である。貼り付け高台を全くつけない丸底を呈している。口縁部に１条の沈線を有し内面に暗文を施している。

羽釜（第９図―58）（図版19）

口縁部が鍔部から内弯気味に立ち上り、外反する。端部は肥厚する。更に長く張り出す鍔をもち鍔部直下に最大径を有する器形である。底部は丸味をもった凸面を呈し、安定が悪い。胴部外面には煤が付着し煮沸具として使用された痕跡が残る。

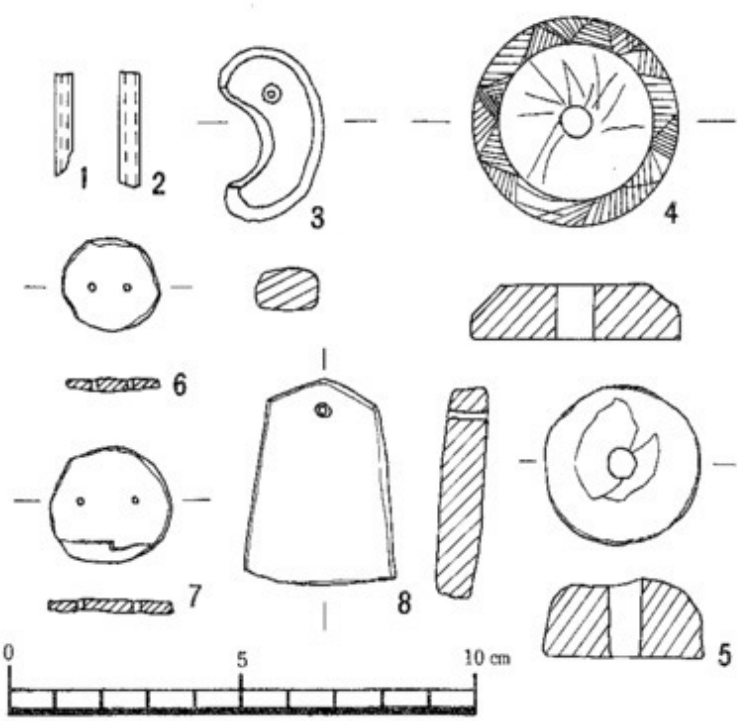
石　製　品（K―007地区出土）

管玉（第11図－１～２）（図版24）

管玉は２点あり、碧玉製の硬質である。現存の長さは、(1)で2.1cmで、幅0.4cm、孔径0.2cm (2)は、長さ 2.4cm、幅 0.48cm、孔径0.22cmである。孔の穿孔方法は両側からで断面は正円形を呈している。色調は、うす青緑を呈する。

勾玉（第11図―3）（図版24）

滑石製で扁平



第11図　出土石製品実測図

な板石を加工した簡単な作りのもので、全長3.7㎝、厚さは頭部で0.8㎝、孔径は0.4㎝をはかる。断面は長方形を呈する。研磨の痕が全体にあり、胴部に格子状の研磨の痕が残っている。穿孔は片側からである。

石製紡錘車（第11図－4～5）（図版24）

2個出土している。ともに滑石製で(4)は直径約4.4㎝、上面径約3.3㎝、厚さ約1.15㎝、孔径約0.8㎝をはかる。断面は台形状を呈し、上から下方になだらかな曲線で広がっているが、下端部にいたって垂直になり、その幅は0.5㎝程度である。上面と下面は丁寧に研磨されているが、上面は放射状に細い線刻が施されている。文様は傾斜面に施されていて細い刻線で構成されている。文様は上から観察すると三角形を交互に組合せたように区切っている。そして各々の三角形状の区画内に平行線、又は山形線を刻んでいるが隣接する区画のそれと同一方向にならない。三角形状区画は15区画ある。(5)は直径約3.3㎝、上面径約2.4㎝、厚さ約1.65㎝、孔径約0.7㎝をはかる。稜線をもたない台形状を呈し、上面と下面は丁寧に研磨されており、無文である。

双孔円板（第11図－6～7）（図版24）

緑泥片岩製双孔円板で、(6)は、長径2.1㎝、短径1.95㎝、厚さ0.25㎝のやや歪みをもった円形を呈する薄い板状の円板で、両面にすり痕を残す。長軸中心上に0.75㎝の間隔をもって直径0.15㎝の2個の円孔があけられたものである。(7)は、長径2.6㎝、短径2.4㎝、厚さ0.25㎝のやや歪みをもった楕円形を呈する薄い板状の円板で、両面にすり痕を残す。長軸中心線上に1.2㎝の間隔をもって直径0.15㎝の2個の円孔があけられたものである。

札形石製品（第11図－8）（図版24）

1個出土している。石材は滑石で長辺4.2㎝、上部で2.3㎝、下部で3.1㎝、厚さ0.9㎝、孔径0.3㎝をはかる。上部に円孔があけられたものである。五角形を呈する板状のもので、両面にすり痕を残す。

V まとめ

今回の調査で発見された遺構は、古墳時代中期～後期の円墳２基、土壙状遺構１基、鎌倉時代の落ち込み状遺構１基が確認され、各遺構内から時代決定を行なう豊富な各種遺物が出土した。

とりわけ、更良岡山遺跡は縄文時代後、晩期の遺跡として学会において周知されていたが、過去に、勾玉、双孔円板、管玉、須恵器、土師器、埴輪が出土し古墳の存在が注目されていた。今回不良好ながらも２基の円墳が検出し得たことは予想外のことであり、当時の古墳のあり方については、四條畷市との隣接の大東市・寝屋川市・交野市においては生駒西麓斜面においての古墳築造がなされているのに対し、四條畷市の生駒西麓については急斜面な為、古墳築造は不可能であると考えられていた。しかし、昭和53年度の四條畷市清滝所在の清滝古墳群（１級河川清滝川分水路改修工事に先立つ調査）について生駒西麓の清滝丘陵の標高約39.0ｍに古墳時代後期の墳丘部削平の古墳２基、大溝１基、合口甕棺墓１基等が検出し、四條畷市内の古墳時代中期末～後期の古墳が比較的まとまりをもった古墳群を発見することができた。

清滝古墳群は後の奈良時代に薬師寺式の伽藍配置をもつ大寺院を建立したためその遺存状態は各遺構とも20～30㎝程度の痕跡となり、平面的にもその形は破壊を受けていた。古墳については周溝内からの出土であって、主体部の検出はなかったことは残念であった。同時に今日の調査の更良岡山古墳群も生駒西麓の忍ケ岡丘陵にあり、同一丘陵には前期古墳の忍ケ岡古墳とともに立地している。この古墳群も近世の水田耕作によって墳丘部は削平されてしまった。しかし、古墳が２基、土壙状遺構１基、落ち込み状遺構１基を確認したことは、生駒西麓の清滝、忍ケ丘両丘陵の古墳築造に大きな資料を提供したものである。

この更良岡山古墳群の範囲については立地及び出土遺物からみて約500～700ｍ内にあると推定される。すなわち、四條畷市岡山新池を中心に寝屋川市にまたがる範囲にあり、今後、寝屋川市においても同一古墳群が近い将来において検出されることであろう。

これまで北河内における古墳群の発掘調査については、大東市堂山古墳群、交野市車塚古墳群の調査が実施されているが、古墳時代後期の円墳の調査が今一歩進んでいない中にあって本古墳群のあり方は少なからず重要な問題を提起する契機となることは必至であり、従来、生駒西麓一帯にみられる古墳群の形成は、堂山古墳群を除いて、６世紀代に爆発的な広がりをみせると考えられていたが、忍ケ岡丘陵一帯にみられる古墳群の形成と同一丘陵の岡山南遺跡の家形埴輪、蓋形埴輪、円筒埴輪及び出土土器から若干古墳の築造時期がさかのぼることが実証された。更良岡山古墳群とあい前後して発掘調査した清滝古墳群は更良岡山古墳群より規模が大きく、古墳の数量、墳形、古墳の築造時期など、すべてにつ

いて、豊富な資料を提供してくれた。しかし、更良岡山古墳群の場合は、古墳群の墳形・古墳数・築造時期に相違があり、そのことがかえって忍ケ岡丘陵と北側の寝屋川市にまたがるまとまった古墳群形成の実体が今後、より明確にすることが可能となった。ことに更良岡山古墳群は5世紀後半より古墳群形成が始まる。一つ北方の太秦丘陵に所在していた太秦古墳群から、鉄鏃・直刀・金環・勾玉・ガラス玉・管玉等の副葬品が採集されている。

この太秦古墳群は採集された鉄製品・石製品からみて埋葬施設は木棺直葬と考えられる。太秦古墳群には横穴式石室をもつ古墳も過去に消滅されているが存在したことが知られ同一丘陵には寝屋古墳群・打上古墳群と呼ばれる6世紀代の群集墳が近くに存在していた。ここで今日の調査によって得られた成果を本概要報告書にまとめしめくくることにしたい。

更良岡山古墳群の築造時期を簡単にまとめると、まず更良岡山古墳群の形成は6世紀以前にさかのぼることが実証されたこと。第2に過去の調査において、出土遺物に石製品が多く、古墳群内のキーポイントを握る集団の被葬者であること。第3には更良岡山古墳群の終焉が須恵器編年のⅡ型式末かⅢ型式初源であり、実年代として6世紀四半世紀の1期で終るという実態である。第4には更良岡山古墳群の終焉後、約1世紀間の空白期をおいて北東に終末期古墳たる横口式石槨をもつ石ノ宝殿古墳が出現する。第5に更良岡山古墳群第2号墳出土の円筒埴輪が川西宏幸氏の円筒埴輪総論において述べられている第Ⅴ期のなかで新しく位置づけられた円筒埴輪に該当し清滝古墳群第1号墳のように円筒埴輪を全く伴なわない古墳が今後発見されるかもしれない。第6に試掘調査において遺構に伴なわない縄文式土器については、これまで知られている北側低地の更良岡山遺跡の縄文時代後期後半～晩期にかけての遺構も今後この台地上にも検出されると考えられる。

最後に土壙状遺構からの馬の歯が出土したことについて少し述べておきたい。

古事記・日本書紀に6世紀の初めに河内馬飼首人荒籠の活躍が記紀に書かれている。この時期が更良岡山古墳群の時期と一致するが、昭和53年の中野遺跡の発掘調査では、これより一時期古い5世紀後半の馬の下顎とともに多量の製塩土器、及び伽耶地域の土器も出土している。又奈良井遺跡においては、一辺約40mの方形周溝を呈する古代祭祀遺構から馬一体分及び頭骨がそれぞれ出土している。馬の出土状況は、馬一体分については一辺約2mの板の上に横位の状態で葬られているのに対し、頭骨については土壙を掘り込みその中に葬られていた。更良岡山古墳群の土壙状遺構内の馬の歯も頭骨部を埋葬されたものと考えられる。すなわち、5世紀後半～6世紀全般には生駒西麓と古代河内湖の間一帯には数多くの馬飼いを生業とするムラがあり、その集団の被葬者がこの更良岡山古墳群か清滝古墳群に葬られたと考えられる。

Ⅵ 観察表

器種	有蓋高杯	高杯(蓋)	有蓋高杯
図及び図版番号	7 － 13 1	7 － 13 2	7 － 13 3
出土地区	K － 007	K － 007	K － 007
法量 (cm)	口径 9.8 器高 9.9 たちあがり高 1.8 受部径 12.0 基部径 4.5 脚底径 9.5 脚部高 5.2	口径 12.4 器高 5.5 稜径 11.8 つまみ径 2.9 つまみ高 1.1	口径 10.2 器高 8.4 たちあがり高 1.4 受部径 12.0 基部径 4.6 脚底径 8.4 脚部高 8.4
形態の特徴	杯部のたちあがりは、内傾したのち、直立し、端部は内傾する凹面を成す。 受部は長く外上方にのび端部は丸い。底部は深く丸い。 脚部は、垂直に短く下った後、下外方にのび、やや下内方に屈曲する。端部は丸い、長方形のスカシ窓を三方向に有する。	口縁部は、わずかに外反して下る。端部は内傾する平面を成す。 稜は断面三角形を成し、端部は鋭い。 天井部は高く丸い。中央には基部の太い上面凸状のつまみを付す。	杯部のたちあがりは、内傾したのち、直立し、端部に内傾する凹面を成す。 受部は長く、外上方にのび端部は丸い。底部は深く丸い。 脚部は、杯部との角度は90°をはかり、下外方に下り、端部近くで、段を成し、下方に屈曲する。端部は丸い。長方形のスカシ窓を三方向に有する。
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯、脚部はハリツケによる。 杯底部外面¾程度、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみはハリツケによる。 天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯、脚部はハリツケによる。 杯底部外面¾程度、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
備考	胎土、やや粗。0.1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗灰色。	胎土、密、白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密、0.1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。

高杯(蓋)	有蓋高杯	無蓋高杯	高杯
7 − 13 4	7 − 13 5	7 − 14 6	7 − 14 7
K − 007	K − 007	K − 007	K − 007
口径 11.3 器高 5.0 稜径 11.2 つまみ径 3.0 つまみ高 1.0	口径 10.0 器高 9.0 たちあがり高 1.4 受部径 12.2 基部径 4.3 脚底径 9.2 脚部高 4.3	口径 11.5 器高 11.4 基部径 2.5 脚底径 9.8 脚部高 7.7	裾部径 2.9 脚部高 6.2
口縁部はほぼ垂直にドり、端部は内傾する平面を成す。 稜は断面三角形を成し、端部は鋭い。 天井部は高く丸い。中央には基部の太い上面凹状のつまみを付す。	杯部のたちあがりは、内傾したのち直立し、端部は内傾する凹面を成す。受部は長く外上方にのび端部は丸い。 底部は深く丸い。 脚部は杯部との角度は90°をはかり、ド外方に下り、端部近くで段を成し、下方に屈曲する。端部は丸い。円形のスカシ窓を三方向に有する。	杯部、口縁部は上外方にのび端部は丸い。 底部は浅く平ら。 脚部は杯部より120°で張り出し、下内方に短かく下った後、下外方へ下り、端部は垂直に凹面を成す。 ¾上方に3条の凸帯を有す。	脚部、脚柱部からゆるやかに裾部に至り、端部はヘラ削りされた形にちかくとじる。 杯部との接合部に棒さし痕がみられる。 脚柱部外面は縦方向の刷毛目が施され端部はゆるくナデ調整が行なわれている。
マキアゲ、ミズビキ成形。 つまみはハリツケによる。 天井部外面¾、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯、脚部はハリツケによる。 杯底部外面¾程度、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯、脚部は、ハリツケによる。 杯底部外面¾程度、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	
胎土、密、白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、やや粗、0.1~3㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、やや粗、0.1~5㎜の黒色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、内面灰色 外面灰黄色	胎土、密。0.1~3㎜の砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、淡赤褐色。

器種	鉢	蓋杯（蓋）	蓋杯（身）
図及び図版番号	7 － 14 8	7 － 14 9	7 － 15 10
出土地区	K － 007	K － 007	K － 007
法量（cm）	体部最大径 9.5 残存高 12.0	口径 10.5 器高 3.3	口径 9.3 器高 3.5 たちあがり高 0.3 受部径 11.5
形態の特徴	口頸部は外弯気味に外上方にのび口縁部に至る。口縁部は欠損のため不明。頸部にやや鋭角に外上方にのびる。体部は丸味をもち、体部最大径が中位に位置する。 底部は丸底で、中位に円孔を穿っている。	口縁部は、内弯気味に下外方にのび端部は丸い。 天井部はやや高く丸い。	たちあがりは、内傾し、端部は丸い。 受部は、上外方にのび端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形口頸部ハリツケ。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面ヲ、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
備考	胎土、密、0.1～5㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密、0.1～3㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。0.1～8㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、内面灰色。 外面青灰色。 断面灰褐色。

蓋杯(身)	有蓋高杯	甕	甕
7 — 15 11	7 — 14 12	7 — 14 13	7 — 15 14
K — 007	K — 007	K — 007	K — 007
口径 10.2 器高 3.5 たちあがり高 0.5 受部径 12.5	口径 12.0 器高 14.8 受部径 14.5 脚底径 13.2 脚部高 10.3	口径 12.2 器高 11.8 胴径 13.2 口縁部高 2.0 胴部高 9.8	口径 13.3 器高 16.2 胴径 16.3 口縁部高 3.2 胴部高 13.0
たちあがりは、内傾し端部は丸い。 受部は、上外方にのび端部は丸い。 底部はやや深く、平ら。	杯部、たちあがりは内傾し更に直立する。端部は丸い。受部は、外方に短かくのび端部は丸い。底部は浅く内弯気味に外上方にのび受部に至る。脚部は、外下方に広がり端部は内弯する稜をもつ。脚部中位に2条の沈線がめぐり、上段及び下段に四角形のスカシ窓が三方向に穿っている。	口縁部、基部でゆるやかに外弯し外上方へ短くのびる。内・外面ともナデ調整を施され肩との境にかすかに段をもつ。 胴部、最大径を中位にもち球形丸底を呈す。 外面は全体に細かい刷毛目が乱方向にかすかに残る。 内面はヘラ削り後ナデ調整が施され指圧痕を認める。	口縁部、基部でゆるやかに外弯し外上方へ短くのびる。 内・外面ともナデ調整を施され肩との境にかすかに段をもつ。 胴部、最大径を中位にもち球形丸底を呈す。 外面は全体に細かい刷毛目が施されている。
マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面1/3回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脚部ハリツケ。 杯部、底部外面1/3回転ヘラ削り調整。 他内・外面回転ナデ調整。		
胎土、やや粗、0.1~5mmの白色砂粒を含む。 焼成、やや良好、やや軟質。 色調、灰黄色。	胎土、密。0.1~3mmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、青灰色。	胎土、密。0.1~3mmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、赤・茶褐色。 胴部から口縁にかけてススが付着。	胎土、密、0.1~5mmの砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、赤褐色。 胴部に10×10cmの黒色斑。

器種	甕	横瓶	蓋杯（蓋）
図及び図版番号	7 － 15 15	7 － 15 16	8 － 16 17
出土地区	K － 007	K － 007	R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層
法量（cm）	口径 12.1 器高 16.3 胴径 15.1 口縁部高 2.9 胴部高 13.4	口径 12.5 器高 27.1 胴径 34.2 基部径 10.6 口頸部高 4.4	口径 12.5 器高 4.8
形態の特徴	口縁部、基部でゆるやかに外弯し外上方へ短くのびる。内・外面ともにナデ調整を施され肩との境にかすかに段をもつ。 胴部、最大径を中位にもち球形丸底を呈す。外面は全体に細かい刷毛目が乱方向に施され、内面はヘラ削り後ナデ調整が施され指圧痕を認める。	口縁部は、基部から上外方に伸び、中位に断面三角形の凸線を有し、端部は丸い。 肩部は、口縁部と90°で下外方に下り、底部に至る。体部最大径を中位に位置する。	口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部は内傾する段を成す。 稜は断面三角形で鋭い。 天井部は高く丸い。
手法の特徴		マキアゲ、ミズビキ成形。 外面肩部、平行タタキ後、クシメ調整。 内面肩部、同心円タタキ。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部½、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
備考	胎土、密。0.1～5mmの砂粒及び小石を含む。 焼成、良好。 色調、赤茶褐色。	胎土、粗。白色小石粒を含む。 焼成、良好、やや軟質。 色調、灰色。	胎土、密。0.3～8mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。

蓋 杯（蓋）	蓋 杯（蓋）	蓋 杯（蓋）	蓋 杯（蓋）
8 － 16 18	8 － 16 19	8 － 16 20	8 － 16 21
R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	R－013第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層
口　径　12.9 器　高　5.0	口　径　13.6 器　高　5.1	口　径　11.9 器　高　4.5	口　径　15.5 器　高　5.2
口縁部は、ほぼ垂直に下り、端部近くで短かく外弯し、端部は内傾する凹面を成す。 稜は鋭い。 天井部は高く、平ら。	口縁部は、やや下外方に下った後、短かく外反し、端部は、内傾する平面を成す。 稜は、やや鈍い。 天井部は、高く丸い。	口縁部は、外下方へ下り、端部は丸い。 天井部は、高く、丸い。	口縁部は、やや下外方に下った後、短かく外反し、端部は内傾する平面を成す。 稜は、短く鋭い。 天井部は、高く、丸い。
マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部⅔、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部⅔、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部⅔、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部⅔、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
胎土、密。0.1～3㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面、灰褐色。 自然釉がかぶる。 内面、白灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、黒灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、白灰色。	胎土、密。0.1～3㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰褐色。 緑色の自然釉がかぶる。

器種	蓋杯（蓋）	蓋杯（身）	蓋杯（身）
図及び図版番号	8 22	8 23	8 24
出土地区	U-011第2分墳周溝上面 褐色砂質土層	R－013第1号墳周溝 褐色砂質土層	R－013第1号墳周溝 褐色砂質土層
法量（cm）	口径 19.6 器高 1.6	口径 13.2 器高 3.7 たちあがり高 0.5 受部径 15.5	口径 10.2 器高 3.8 たちあがり高 0.3 受部径 13.0
形態の特徴	口縁部は、内傾気味に下り、端部は鋭い。 天井部は凹を成し、低い。	たちあがりは、内傾してのび、端部は丸い。 受部は、やや上外方にのび、端部は丸い。 底部はやや浅く丸い。	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は深く丸い。
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面$\frac{3}{4}$回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部$\frac{3}{4}$回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部$\frac{3}{4}$回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
備考	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。

蓋 杯（身）	蓋 杯（身）	蓋 杯（身）	蓋 杯（身）
8 － 16 25	8 － 16 26	8 － 16 27	8 － 16 28
S－012落ち込み状遺構 淡褐色砂質土層	R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層
口　　径　10.6 器　　高　3.8 たちあがり高　0.4 受　部　径　13.0	口　　径　9.7 器　　高　4.5 たちあがり高　0.5 受　部　径　12.2	口　　径　12.4 器　　高　4.7 たちあがり高　1.8 受　部　径　15.0	口　　径　11.5 器　　高　5.8 たちあがり高　2.2 受　部　径　13.8
たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや深く丸い。	たちあがりは、内傾してのび端部は内傾する平面を成す。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部は深く、やや平ら。	たちあがりは、内傾してのび短く直立して端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部は深く、丸い。	たちあがりは、内傾してのび端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部は深く丸い。
マキアゲ、ミズビキ成形。 底部$\frac{1}{2}$回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部$\frac{1}{3}$回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部$\frac{1}{3}$回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部$\frac{1}{3}$回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面灰色。 内面青灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。

器種	土師器椀	高杯	高杯
図及び図版番号	8 29	8 30	8 31
出土地区	R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	S－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	S－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層
法量（cm）	口径 11.6 器高 4.6	口径 14.2 器高 13.9 脚底径 11.1 脚部高 10.0	残存高 11.6 脚底径 10.8 脚部高 10.0
形態の特徴	口縁部は、全体に浅い皿状を呈し、口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は丸い。 体部は平坦な平底から丸くゆるやかにのびて口縁部に続く。	杯部、浅い杯部で底部と口縁部の境界がなく、脚部から外上方へのびて口縁端部に至る。 底部内面はナデ調整。 口縁部付近は内外面ともにミズビキに類似した回転ナデ調整。 脚部、脚柱部上半が中実の脚部で脚柱部はほとんどひらかずに裾部でひろがり、脚柱部に握りしめた痕跡があり、縦方向の刷毛目が施されている。内面はヘラ削りの後ナデ調整が施されている。	脚部、脚柱部上半が中実の脚部で脚柱部はほとんどひらかず裾部でひろがり、脚柱部に握りしめた痕跡がある。 裾部に乱方向の刷毛目が施されている。
手法の特徴	内・外面ともにナデ調整が施されている。		
備考	胎土、密。0.1～5㎜の白色砂粒を多く含む。 焼成、良好。 色調、赤味のある茶褐色。	胎土、密。0.1～5㎜の砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、赤茶褐色。

高　杯	無蓋高杯	無蓋高杯	台付壺
8 32	8 33	8 － 16 34	8 － 35
R－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	S－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	S－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	S－012第1号墳周溝 淡褐色砂質土層
口　径（14.3） 残存高 14.6 脚底径 11.2 脚部高 9.1	口　径 14.2 器　高 7.4 脚底径 10.6 脚部高 2.9	口　径 12.2 器　高 7.2 脚底径 9.5 脚部高 3.0	口　径 12.2 器　高 7.7 脚底径 10.4 脚部高 4.0
杯部、浅い杯部で底部と口縁部の境界がなく、脚部から外上方へのびて口縁端部に至る。 底部内面はナデ調整。 口縁部付近は内外面ともに回転ナデ調整。 脚部、脚柱部上半が中実の脚部で脚柱部はほとんどひろがらず裾部でひろがり、脚柱部に握りしめた痕跡があり、縦方向の刷毛目が施されている。 内面はヘラ削りの後ナデ調整が施されている。	杯部、口縁部は上外方にのび端部は丸い。 底部は浅く、丸い。 脚部、杯部よりほぼ90°張り出し、下外方へのび、端部近くで短かく水平にのび、丸く屈曲し、丸い端部に至る。	杯部、口縁部は上外方にのび端部は丸い。 底部は浅く丸い。 脚部、杯部よりほぼ90°張り出し下外方へのび端部近くで短かく水平にのび丸く屈曲し、丸い端部に至る。	口頸部は、口頸基部より短かくやや垂直に立ち上った後、やや内傾し端部に至ると思われる。脚部の基部は細く、中位まで外反して開き、そこで丸く鈍い稜を呈し、下半分は外下方へ内湾して開き、端部は内傾する平面を呈す。 脚部上半三方に細長い台形状スカシが穿たれており、下方に浅い沈線が2条まわっている。
	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯部、底部外面¾回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 杯部、底部外面¾回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 内外面回転ナデ調整。 体部より底部にかけて外面、回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
胎土、密。 焼成、良好。 色調、赤茶褐色。	胎土、密。0.1～5mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰黄色。	胎土、密。0.1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。0.1～2mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、白灰色。

器種	無蓋高杯	壺	壺
図及び図版番号	8 36	8 — 17 37	8 — 17 38
出土地区	R—013 第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	U—011 第2号墳周溝 黒褐色砂質土層	V—011 第2号墳周溝 黒褐色砂質土層
法量 (cm)	口径 16.0 残存高 8.5	残存高 10.1 基部径 2.8 体部最大径 9.5	残存高 11.0 基部径 3.0 体部最大径 10.0
形態の特徴	杯部、口縁部は内弯気味に外傾し端部は丸い。杯部与・与に鈍い断面三角形の凸線を有す。	口頸部は外弯気味に外上方にのび口縁部に至る。口縁部は欠損のため不明。頸部にやや鋭角に外上方にのびる。肩部に1条の凹線を有す。体部は丸味をもち体部最大径が中位に位置する。 底部は丸底で中位に円孔を穿っている。 線内部に円孔穿部が入っていた。	口頸部は外弯気味に外上方にのび、口縁部に至る。口縁部は欠損のため不明。頸部にやや鋭角に外上方にのびる。肩部に1条の凹線を有す。体部は丸味をもち体部最大径が中位に位置する。 底部は丸底で中位に円孔を穿っている。
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ整形。外面底部に回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 口頸部ハリツケ、底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。口頸部ハリツケ。底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。
備考	胎土、密。0.1～3㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗灰色。	胎土、密。0.1～5㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗灰色。	胎土、密。0.1～5㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、暗灰色。

壺	台付長頸壺	蓋　杯（蓋）	蓋　杯（身）
8 － 17 39	8 － 18 40	8 － 17 41	8 42
V－011 第2号墳周溝 黒褐色砂質土層	V－011 第2号墳周溝 黒褐色砂質土層	V－011 第2号墳周溝 黒褐色砂質土層	V－011 第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
残　存　高　12.0 基　部　径　3.5 体部最大径　9.3	体部最大径　17.1 残　存　高　20.5 高　台　径　10.8 高　台　高　3.1 基　部　径　5.2	口　　径　10.6 器　　高　3.2	口　　径　8.1 器　　高　1.7 たちあがり高　0.2 受　部　径　10.0
口縁部は外弯気味を外上方にのび、口縁部に至る。口縁部は欠損のため不明。頸部にやや鋭角に外上方にのびる。体部は丸味をもち、体部最大径が中位に位置する。 底部は丸底で中位に円孔を穿っている。	口縁部は欠損。 口頸部は、やや内傾している。肩部は口頸部とほぼ120°をなして張り体部⅗に最大径を有し内弯して下る。最大径部分に沈線を有し鋭い。 底部は平らで、ハの字形にひろがり内側で接地する高台を付す。	口縁部は少し内弯して端部に至る。端部は丸い。 天井部は浅く、凹を有し、内弯しながら端部に至る。	たちあがりは内傾してのび、端部は鋭い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 底部は浅く丸い。
マキアゲ、ミズビキ成形、口頸部ハリツケ。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。回転ナデ調整。 高台はハリツケによる。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部⅗、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部⅗、回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。
胎土、密。0.1～3㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、白灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰青色。白然釉かぶる。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面・青灰色。 内面・灰色。

器種	蓋杯（身）	蓋杯（身）	蓋杯（身）
図及び図版番号	8 43	8 － 17 44	8 － 17 45
出土地区	U－011第2号墳周溝 黒褐色砂質土層	U－011第2号墳周溝 黒褐色砂質土層	U－011第2号墳周溝 黒褐色砂質土層
法量（cm）	口径 9.1 器高 2.2 たちあがり高 0.1 受部径 10.7	口径 9.1 器高 2.9 たちあがり高 0.2 受部径 11.4	口径 9.2 器高 3.2 たちあがり高 0.3 受部径 11.0
形態の特徴	たちあがりは、内傾するたちあがりで、端部は鋭い。 受部は、上外方にのび端部は丸い。 底部は浅く平ら。	たちあがりは、内傾してたちあがり、端部はやや鋭い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部は深く平ら。	たちあがりは、内傾してたちあがり、端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部は深く丸い。
手法の特徴	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部½回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部⅔回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部⅔回転ヘラ削り調整。 他は、回転ナデ調整。
備考	胎土、密。0.1～3mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。緑色の自然釉をかぶる。	胎土、0.1～6mmの白色砂粒を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面・灰黄色。 内面・青灰色。	胎土、0.1～6mmの白色砂粒と0.7～1.0cmの小石を含む。 焼成、良好、堅緻。 色調、外面・青灰色。 内面・灰色。 断面・淡茶灰色。 青色の自然釉をかぶる。

高　　杯	土 師 器 杯	土 師 質 皿	土 師 質 小 皿
8 － 17 46	8 47	8 － 19 48	8 － 19 49
Ⅴ－011第２号墳周溝 黒褐色砂質土層	Ⅴ－011第２号墳周溝 黒褐色砂質土層	Ｓ－013落ち込み状遺構 灰褐色砂質土層	Ｓ－013落ち込み状遺構 灰褐色砂質土層
口　　径　11.7 器　　高　8.0 脚 底 径　5.9 脚 部 高　4.7	口　　径　12.7 器　　高　4.0	口　　径　11.2 器　　高　2.8	口　　径　8.7 器　　高　1.7
杯部、浅い杯部で底部と口縁部の境界がなく、脚部から外上方へのびて口縁端部に至る。 底部内面はナデ調整。 口縁部付近は内外面ともにミズビキに類似した回転ナデ調整。 外面下半は脚部を挿入した後、刷毛目を施している。 脚部、脚柱部からゆるやかに裾部に至る。 脚柱部握りしめた痕跡があり、裾部にも指圧痕が残る。 内面はヘラ削りの後、ナデ調整が施されている。	口縁部はわずかに外反し端部は丸い。 体部、底部は少し平担な面をもつが全体に球形を呈す。内面はヘラ磨き後ナデ調整を行なう。	口縁部両面は横ナデ、外面下半には回転痕あるいは、指圧痕。内面はナデあるいは刷毛調整される。	口縁部両面を横ナデし、底部には指圧痕がのこる。 底部は凸がいちじるしい。
胎土、密。0.1～5㎜の白色砂粒を含む。 焼成、良好。 色調、黄褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、赤褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、褐色。

器種	土師質小皿	土師質小皿	銅製椀
図及び図版番号	8 － 19 50	8 51	8 52
出土地区	S－013落ち込み状遺構 灰褐色砂質土層	V－011第2号墳周溝上面 褐色砂質土層	R－013 包含層 褐色砂質土層
法量 (cm)	口径 8.2 器高 1.9	口径 7.6 器高 1.0	口径 3.9 器高 1.5 高台径 2.0 高台高 0.2
形態の特徴	口縁部、内面を横ナデ、下面には指圧痕。 内面はナデあるいは、刷毛調整される。	口縁部両面を横ナデ、下面には指圧痕、内面は平滑である。 内面はナデあるいは刷毛調整される。	口縁部はわずかに円弧を描いて内弯したのち、端部へ至る。端部は丸い。 体部外に2条の断面三角形の凸線を有している。内面に口縁端部下に3条、中央から底部に5条の凹線を有している。 底部は、ほぼ平らな面を呈した高台を有している。
手法の特徴			
備考	胎土、密。 焼成、良好。 色調、褐色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、褐色。	

瓦器椀	練り鉢	甕	高杯
8 － 19 53	8 54	8 55	9 56
V－011第2号墳周溝上面 褐色砂質土層	R－013土壙状遺構 褐色砂質土層	R－013土壙状遺構 褐色砂質土層	U－011第2号墳周溝 淡褐色砂質土層
口径 9.0 器高 3.8	口径 27.9 残存高 4.4	口径 25.2 残存高 7.0	口径 17.3 残存高 5.2 杯部高 5.0
比較的深い体部で貼り付け高台を持たない丸底。 最終末期の瓦器椀である。 口縁部下に回線状の窪みがつく。 内面には横方向の連続輪状の暗文が施されている。	口頸基部より外反するもので、端部付近で外方へ屈曲して、稜を呈したのち外反して端部に至る。端部は丸い。	口頸基部より垂直ぎみに立ち上り、外反し、断面三角形の凸線を1条めぐらす。 頸部端で外下方に屈曲した後外弯気味に丸味をもつ。 頸部に1条の沈線と2条（4本、5本）の波状文が施されている。	杯部、浅い杯部で口縁部は上外方にのび端部は丸い。 口縁部付近は内外面ともに回転ナデ調整。
	マキアゲ、ミズビキ成形。 頸部ハリツケ。 回転ナデ調整。	マキアゲ、ミズビキ成形。 頸部ハリツケ。 回転ナデ調整。	
胎土、やや良。 焼成、良好、硬質。 色調、外面に煤付着。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、灰色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。	胎土、密。 焼成、良好。 色調、赤褐色。

器種	片口大鉢	羽釜	甕
図及び図版番号	9 57	9 58	9 － 19 59
出土地区	R－013第1号墳周溝 淡褐色砂質土層	S－013落ち込み状遺構 灰褐色砂質土層	U－011第2号墳周溝 黒褐色砂質土層
法量（cm）	口径 18.0 器高 10.3 体部径 18.5	口径 24.8 残存高 20.5 鍔部径 32.0	口径 28.0 器高 61.5 基部径 19.5 胴部径 49.2 口頸部高 10.0
形態の特徴	口縁部、片口の口縁部で内弯気味に立ち上り、端部は丸くおわる。 体部、底部は平らで最大径は上位に位置する。 内面はナデ調整。 外面は刷毛目が施されている。	口縁部は体部より短く立ち上がり、更に外方へ屈曲する。端部は厚味を持ち丸くとじる。 腹の張る体部外面上半は粗い篦削り、下半は篦ナデ、内面は刷毛調整。 比較的瓦質羽釜である。	口頸部は、基部より外反しながら立ち上り、弯曲して後、稜をなし、更に内弯して端部に至る。口縁端部は丸い。 胴部、肩の張った球形。丸底の器形。 外面は叩きを行ったうえにカキ目を施している。内面は同心円文がそのまま残る。
手法の特徴			マキアゲ、ミズビキ成形。 調整は内・外面ともに回転ナデ調整。
備考	胎土、密。 焼成、良好。 色調、褐色。	胎土、砂粒を多く含む。 焼成、やや良。 色調、黒褐色。	胎土、密。 焼成、良好、堅緻。 色調、青灰色。

図版

図版1　遺跡周辺の航空写真

1970・3・9　大東航空測量K・K撮影

図版2　更良岡山古墳群周辺航空写真

1979・2・15　アジア航測K・K撮影

図版3　忍ケ岡古墳航空写真

1979・9・22　アジア航測K・K撮影

図版4　更良岡山古墳群遠景

（南から）

（南東から）

図版5　更良岡山古墳群近景

（西から）

（東から）

図版6　更良岡山古墳群第1号墳全景・I

（南西から）

（西から）

図版7　更良岡山古墳群第1号墳全景・II

（東から）

（北から）

図版8　更良岡山古墳群第1号墳全景・Ⅲ

（東から）

（西から）

図版9　更良岡山古墳群第2号墳全景

（西から）

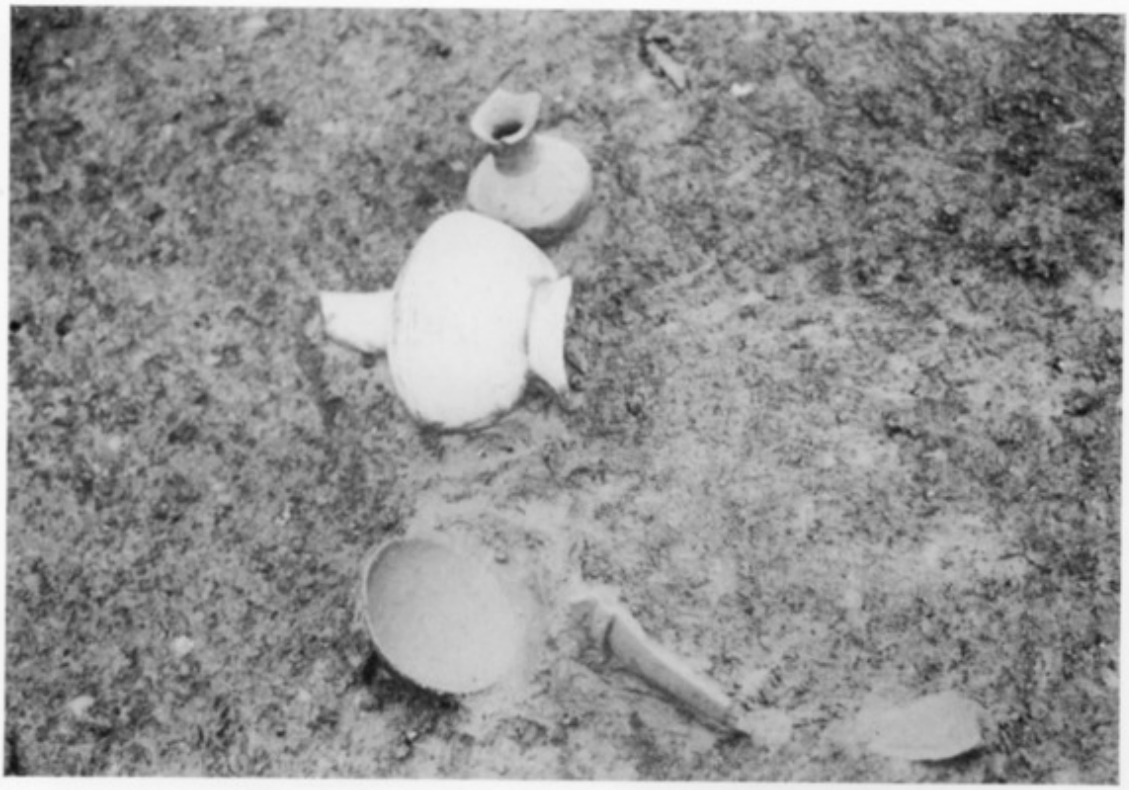
（東から）

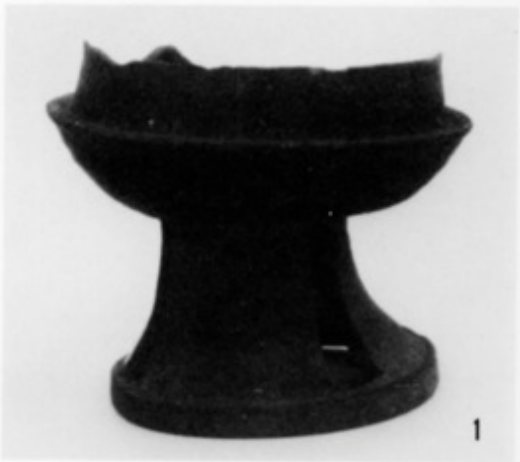
第2号墳全景

第2号墳周溝底土器出土状況

図版11　更良岡山古墳群第2号墳周溝底土器出土状況・II

図版12　更良岡山古墳群第2号墳周溝底土器出土状況・Ⅲ




1

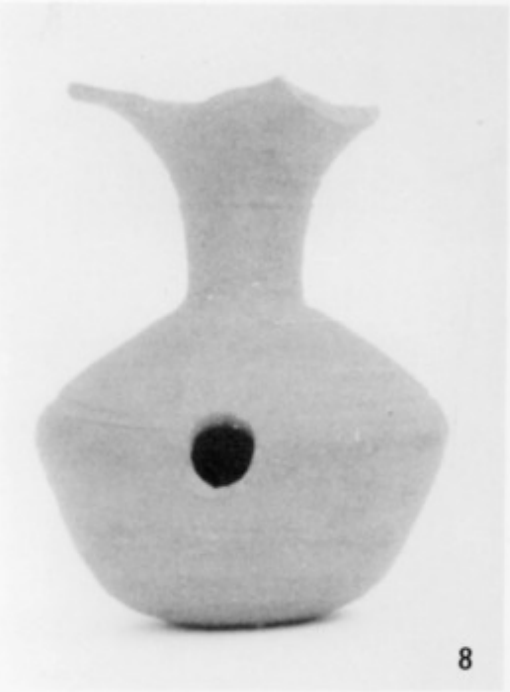
4

2

5

3

6


8

12

9

7

13

10

11

14

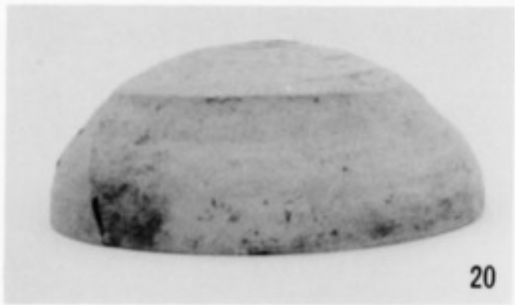
15

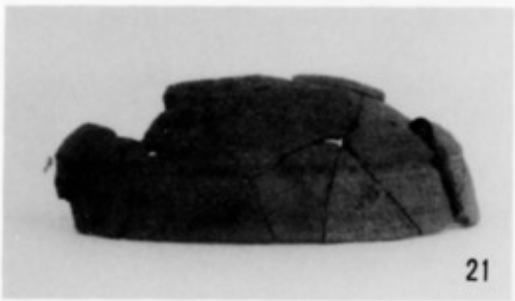
16

17

18

19


20


21

25

26

27

28

34

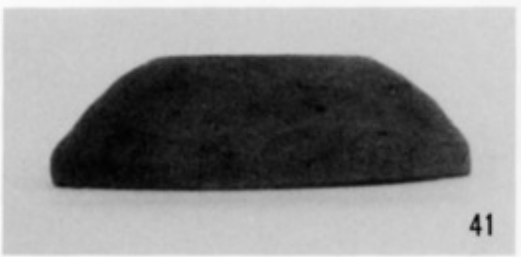
37

38

39

46

44


41

45

図版18　遺物写真・土器Ⅵ

40

59

48

49

50

53

58

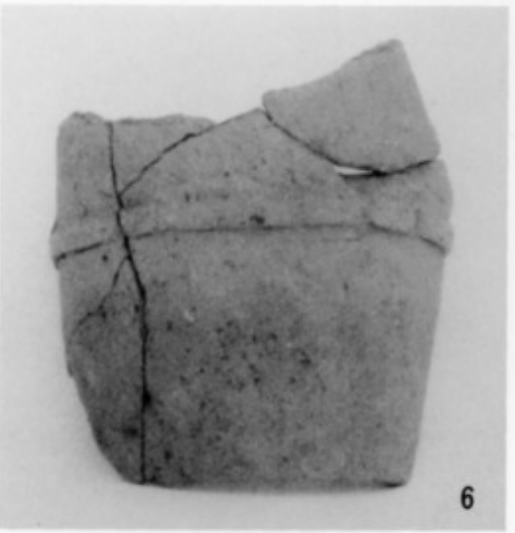
1

2

3

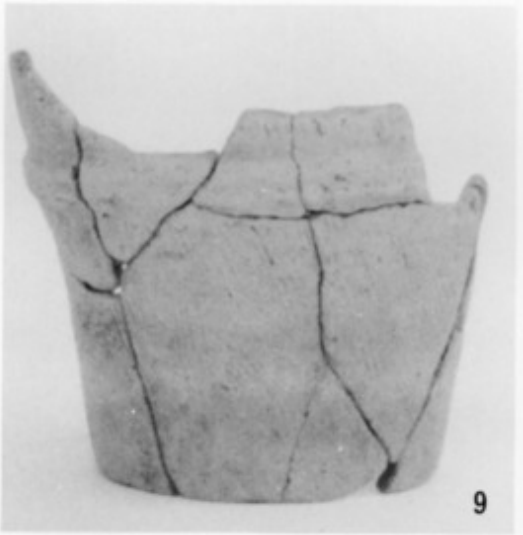
4

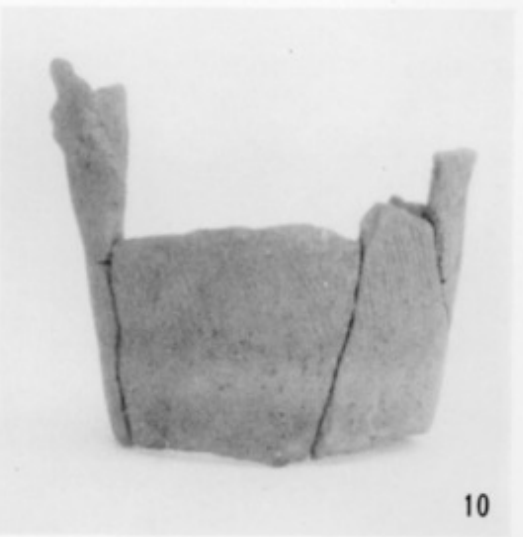
5


6

7

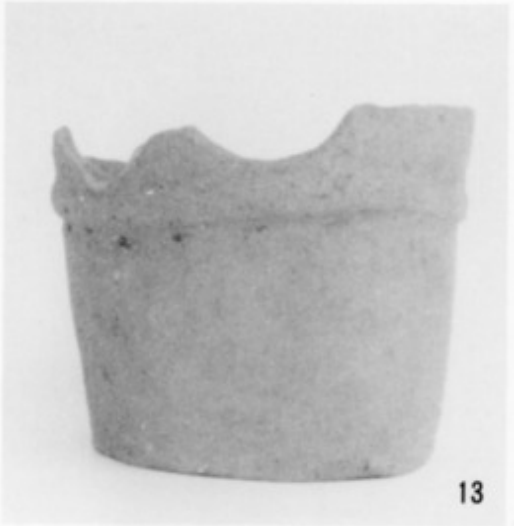
8


9


10

11

12


13

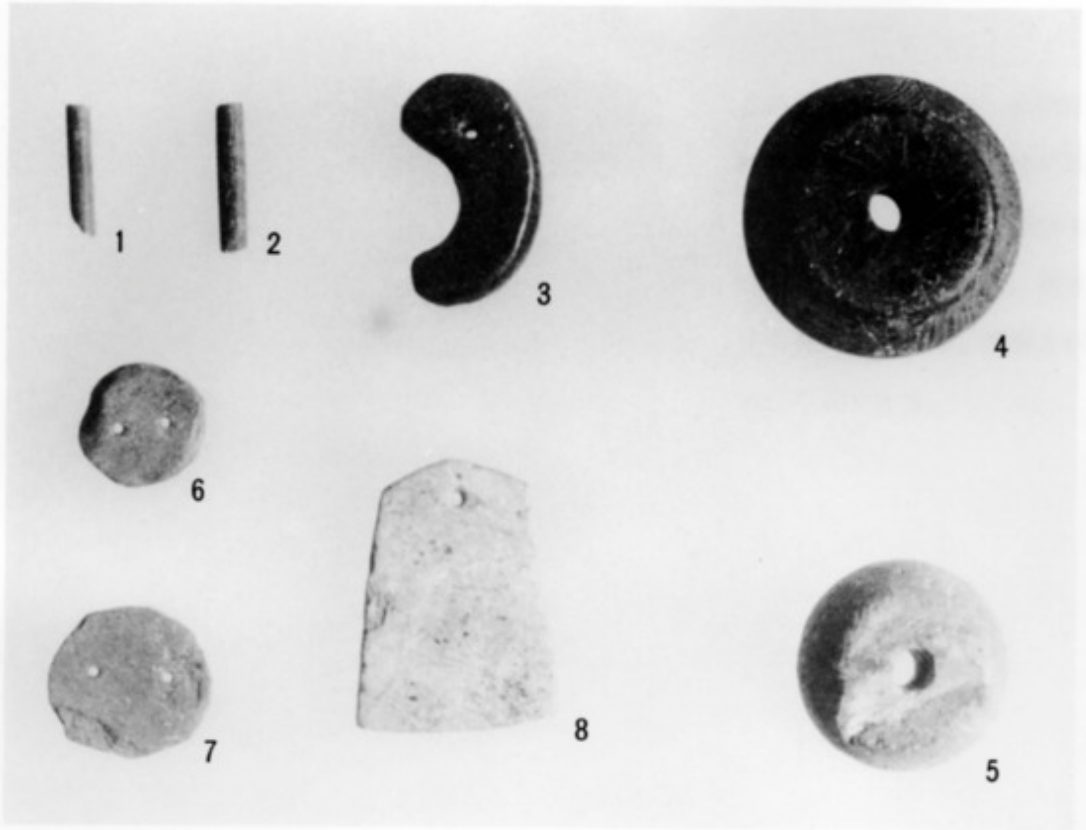
14

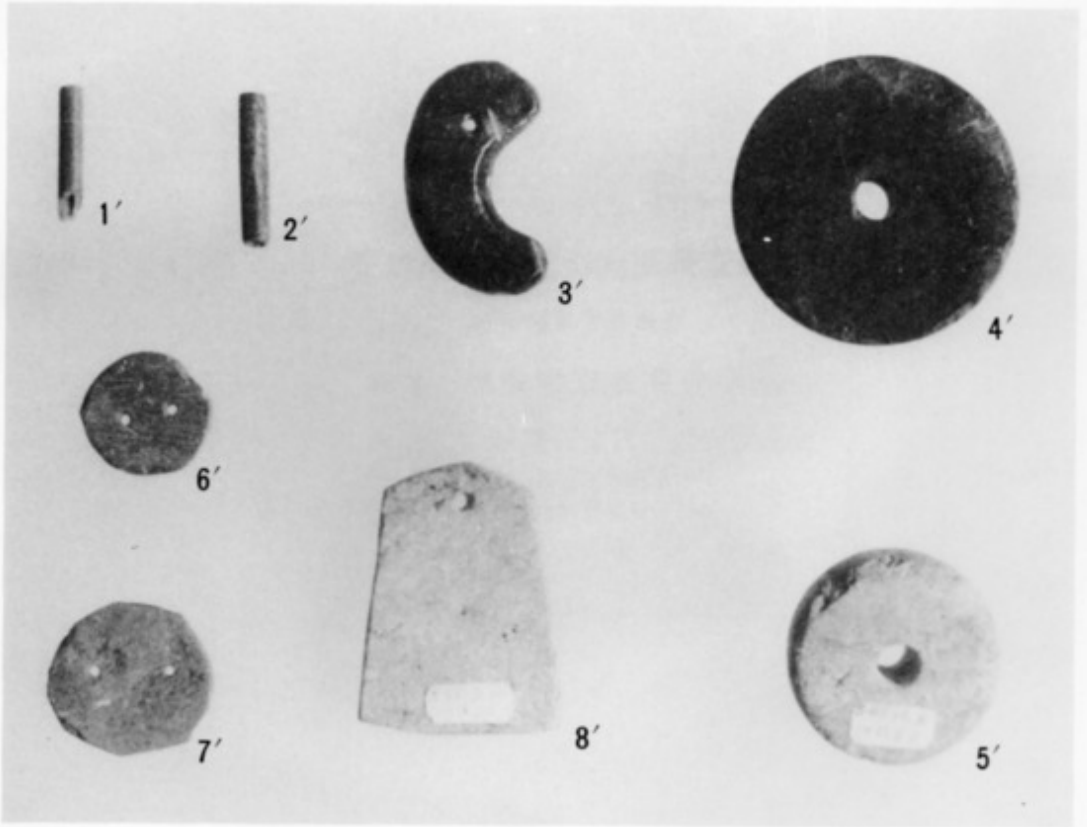
18

15

16

19


1
2
3
4
6
7
8
5


1′
2′
3′
4′
6′
7′
8′
5′

更良岡山古墳群発掘調査概要

昭和56年3月発行

編集　四條畷市教育委員会

発行　四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1－1

印刷　田中耕株式会社